
呼声

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼声

【Nコード】

N8534G

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

高1の冬、私は双子の妹を殺して、埋めた。 「失踪」した彼女の行方を知る者は私一人。私は消えた妹を心配する姉を演じ続けていればいい。ところがある日、死んだはずの妹の声が聞こえてきて……。

第一声（前書き）

1年ほど前まで掲載していた作品のリメイクです。
全11話で、1日2話ずつ更新したいと思います。

第一声

妹が失踪してもう一週間になる。家の中からは暖かい空気が抜けきり、皮膚を麻痺させるような冷たさだけが充満していた。両親の顔からはみるみる肉が落ち、骸骨の標本が夢遊病患者のようにふらふら歩き回っているみたいだ。もう母さんは父さんの下っ腹を見てちよつと出てきたんじゃないのなんて笑うことすらできない。四月からずっと作ってくれていたお弁当はなくなり、毎日私に五百円だけ渡して好きなものを買わせるようになった。父さんはかろうじて会社に行っているけど行っているだけで勤めているかどうかは分からない。毎日定時に家を出て、定時に帰ってきて、死んだように眠る。我が家から漂ってくるマイナスオーラに、近隣住民も顔を曇らせていた。

そんな中、私は比較的冷静な方であった。もちろん外で大笑いするようなことはないけれど、食事が喉を通らなくなるほど悲しんでいないのは確実だ。私達は表向き決して仲の悪い姉妹ではなかったし、いつも一緒に登校していたし、髪型もおそろいでおかげでよく間違われた。私は妹の柔らかい笑顔が好きだったしそこに嘘はないけれどだからって彼女がいなくなったらから気を落とすかというよりはそれはあり得ない。なぜなら私は彼女の居場所を知っていて、彼女がそこで何をしているかも知っている。

私しか知らないことだ。彼女は今、街のはずれにある暗い雑木林の腐葉土の中で眠っている。

私が殺して、埋めた。

正月が終わり、三学期が始まって、日常が再び姿を現し始めた。私の通う高校とて例外でなく、授業は徐々に落ち着きを取り戻し、代わりに生徒達の退屈が増していた。三年生はいよいよセンター試験も間近だが、私のような一年生にはほとんど関係がない。三学期

は特に楽しめるような行事もなく、三ヶ月という短い期間では勉強する気も起きず、無気力になりがちだ。何か事件でもないものかと誰もが待ち望んでいるが、そうそう愉快的事件は起こらない。

そんな彼らから見れば、現在の私の境遇は哀れなれどうらやましいものに違いなかった。

その日の朝も、私は黙って家を出た。行ってきましただなんて言っても無駄なことは分かっているから。両親に私の声は届かない。今二人が欲するものは、妹の春風のような声だけだ。

私の家は閑静な住宅街の真ん中にある一軒家だ。門を出ると右も左も正面も似たような一軒家ばかり。門がせわしく開いては、薄着の小学生やコートを着込んだサラリーマンがひっきりなしに出ていく。そして彼らは私の姿を見つけると、例外なくぎこちない笑顔で挨拶をした。私もそれに弱々しい笑顔で答えて見せた。

外の空気は冷たいが湿っぽくはなく、家の中よりはずっと心地よい。剥き出しの太腿はしびれるほど冷えていたが、私は冬の空気が好きだった。触れてもつかめぬ無駄のない透明感が私の心を落ち着かせる。深呼吸をすると肺の中が一掃されるようだ。いつか死ぬなら冬の日に、研ぎ澄まされた空気の中で静かに息を引き取りたいと思う。

私が死ぬ時最も避けたい季節は、春だった。なぜならそれは私の季節ではないから。

私の中で、春は妹だけに許された季節だった。よく双子は性格が反対になると聞くけれど、それはあながち間違いでもないらしい。私が「冬」ならば、妹は間違いなく「春」であった。彼女には薄い黄色や桃色といった暖色がよく似合い、目を細めて微笑めば可愛らしい花が一斉に開くようだった。おっとりとした優しい口調で話し、実際性格もいらいらするほど優しくかった。本当なら暖かい春の日に、可憐に咲いた花に埋もれて死ぬのがお似合いだったに違いない。この季節に死ぬべきだったのは私の方なのだ。

しかし私は時々思う。本当は私にだって、「春」になる資格はあ

ったんじゃないだろうか？偶然妹が先にそのポジションを奪ってしまったから、私は対極にある「冬」にならざるを得なかったんじゃないだろうか、と。世の中はすべからくそうなっている節がある。外見も全く同じなのに、性格も同じときては、もはや同じ人間になつてしまう。だから何か超自然的な力が　神様なんて言わない、私はそんなものを信じていないから　私達の中身を全く反対のものにしてしまったのだ。

もつとも、彼女がいなくなった今、私はいつでも季節を変えられるのだけど。

覚えず、口の端がくつと持ち上がる。私はあわてて頬の内側を噛んで、無表情を取り繕った。こんなところを誰かに見られたら不審に思われるに違いない。それはいけない。私は「大切な妹の行方が分からなくなり最も悲しんでいる肉親」であらねばならないのだ。

「最も悲しんでいる」肉親で。

「麻子？」
あさこ

不意に背後から呼ばれた名に、びっくりと肩がこわばる。

聞き慣れた声だ。小さな頃からいつもそばにあった、感情に素直な少年の声。たった今発されたそれは、深い悲哀と、その上にいくらかの期待が乗せられていた。

その期待が、私に悲しみを運ぶ。

「……貴平」
たかひら

私は隣家の幼なじみの名を呼びながらゆっくりと振り返った。途端、彼の顔が失望に戻っていくのが目に見えて分かった。胸の痛みとやり場のない憤りが私を襲う。彼、貴平は顔を曇らせて、ばつ悪げに頭を掻いた。

「あ、あ。……亮子か」
りょうこ

「残念そうね」

「いや悪いそうじゃなくて、……その、」

私は白いため息をついた。彼は全く隠し事のできない人間である。私には彼の心が手に取るように分かるのだ、　彼は私の後ろ姿を

妹のものと重ね、帰ってきたのではないかという期待をかけていた。身長も髪型も、全く同じ私達だから。

「いいのよ、ごまかさなくて。……私だって、麻子には早く帰ってきて欲しいと思ってるんだから」

私の言葉に彼は暗い顔で頷いて、悪かった、ともう一度謝った。

そしてうつむき、二人は重々しく歩き出す。冬休みが開けた頃はこうではなかった。私と、妹と、貴平と。寒い寒いとわめきながらも、学校まで笑顔を絶やさず歩いていったのに。

「警察から、何か進展があったとか情報はないのか？」

うつとうしく伸びた前髪を小指でかき分けながら、貴平がぼそぼそと言った。道の奥を見る目はうつろで、とても何か期待しているような顔には見えない。

「あつたら真つ先に言ってるわ。……ちゃんと調べてるのかしらね、あの人達」

私も肩をすくめてみせるけれど、本心は全く逆だ。内心私は警察の怠慢を望んでいた。彼らは曲がりなりにも捜査のエキスパートだ。今は家出娘扱いでとどまっているが、本気を出したらいつ私を捕まえるか分からない。出来れば、私達家族を見捨てて欲しいとさえ思っていた。

貴平はアスファルトに目を落とし、ため息をついた。

「お前、本当に何も知らないのか？麻子がいなくなった日、一緒に帰ったりしなかった？」

「知らないって言ってるでしょう。あの日、私は図書委員の仕事で放課後残ってたの。麻子は先に帰った。なのに家に帰ってもいなくて……すぐ帰ってくると思ってたのに、まさか一週間も……」

語尾を濁らせ、マフラーに口を埋めて黙り込む。これ以上の質問を拒絶する姿勢を見せると、貴平は諦めたように「そうか」とだけ呟いた。

私達は学校までの残り一キ口を、一言も口を利かずに鬱々と歩いた。雪の降り出しそうな灰色の雲が、目の前に重く垂れ込めていた。

第二声

貴平と私達双子は生まれた時からずっと一緒にいた。同い年の子どもが近所にいれば、仲良くなるのが自然だろう。幼稚園も小学校も中学校もずっと一緒に、去年の春には近所の高校に三人そろって入学した。毎朝当然のように一緒に登校し、お互いの家にもよく遊びに行った。

ずっと三人、同じ目線でいられると思っていた。しかし歳月はそれを許しはしなかった。

私達は所詮男女であり、そこに恋愛感情が芽生えるのもまた自然なことだったのだ。私はいつの頃からか貴平を愛するようになり、同じ遺伝子を持った妹もまた、彼を愛していた。それはある程度仕方のないことだと思っている。目の前で口に出したことこそなかったが、貴平とてそれには気付いていたはずだ。問題は、彼がどちらを選ぶのかと言うことだった。

結果は昨年の秋、唐突に知らされた。妹が私に先んじて貴平に告白し、二人は付き合い始めたのだ。

出遅れた　そんな思いが何よりも強くあった。私が先に告白していたら、今貴平の彼女は私だったかもしれないのに。　自信過剰な女だと思われるかもしれないが、私は妹に負ける気が全くしていなかった。私は妹より能力的に優れている面が多くあったのだ。それは勉強面であつたり、運動面であつたり、普段の生活態度であつたりした。妹はしょっちゅう皿を割るが、私は五年に一度割るか割らないか。高校入試の点数だって、私の方が高かった。貴平は告白されてついOKしたただけであり、私にも十分可能性はあったはずだ。そう思っていた。

しかしどうやらそうではないらしいと知ったのは、二人が付き合い始めて間もない頃だった。日曜日、私達はテスト勉強のために妹の部屋に集まっていた。そして妹がトイレに立った時、私は貴平に

聞いたのだ。私じゃ駄目だったのか、と。すると彼はこう答えた。

「でも俺は麻子が好きだから……」、「ごめんな」。

その時私はようやく、私と妹が全く別の生き物で、私に足りないものを妹はことごとく持つているのだと悟ったのである。

一週間前私が妹を殺したのは、少なからずそのことが関係しているのだろう。今でもあの時の感触は生々しく手に残っている。薄暗い雑木林の真ん中で、おそろいのマフラーを後ろから引っ張り、もかく彼女を冷たい土に押しつけて……。

彼は私が妹を殺したことを知らない。両親も知らない。クラスメートも、先生も知らない。誰も知らない。あるいは絶対に生きていると思いこみ、あるいは無関心に聞き流す。誰も私がこの手で彼女を殺したなどと疑ってはいないのだ。

私は周囲の期待に応え、かわいそうな姉を演じてやる。それだけで十分だった。

私と妹、それに貴平は、それぞれ別のクラスに属していた。順に、四組、三組、五組である。さすがに学校側としては双子を同じクラスにはしたくないらしく、私と妹は生まれてこの方一度も同じクラスになったことがなかった。貴平とは何度か一緒になった。

二時限目の体育の直前、私はジャージを忘れたことに気がついて三組に借りにいった。三組には妹つながりで何人か友人がいる。教室の入り口でそのうちの一人を呼び、ジャージを貸して欲しい旨を伝えると、彼女は控えめに笑顔を作ってこう言った。

「麻子のジャージが、机の横に掛けてあるけど……。使う？」

窓際の列の前から三番目、一番目当たりのいい席。春の化身のような彼女に最も似合う位置。一週間前からそこはそのままにしているらしい。それどころか、黒板には今週の週番として彼女の名が書いてあった。もう帰ってこないと言うのに！もつともそれを知っているのは私だけなのだから仕方ないが、それを思えば、彼女のジャージを無断で使うのも悪いことではないような気がした。言っ

しまえば、彼女のものはもう私のものなのだ。彼女の服も、鞆も、アクセサリーも、部屋も、同じ細胞を分かった私のものであるに相違ない。根拠もなくそう思っていた。

しかし私は少しだけ微笑んで首を振った。

「もし麻子が帰ってきた時、自分のジャージがなかったら困っちゃうでしょ。だからごめん、貸してくれる？」

途端に友人の顔は哀れみに満ち、自分のジャージを貸すことを黙って承諾してくれた。私はありがたくそれを借りて着替え、体育館へ向かった。

あの友人はいつも私と妹を比較し、やっぱり麻子の方がいい子だよー、と口癖のように言っていた。もちろん私の目の前ではない。しかしそういった陰口は、巡り巡っていずれは本人の耳に届くものなのだ。私は妹の口からそれを聞いた。妹は無邪気で、悪く言えば無神経な子どもだったから、悪びれもせずになにこしながらそんなことを言ったのだ。

私は妹にいらついていた。それもまがうことなき事実だった。

「パスパス！こっちこっち！」

「取らせるなマークメーカー！」

体育の時間になると女子は人が変わる。体育は男女別で、今の時期女子はバスケットボール、男子はサッカーをしていた。普段トイレの鏡の前で熱心に前髪をいじっている女子達が、武者のように髪を振り乱してボールを追いかける。閉鎖された体育館は途端に女達の戦場へと変わり、彼女らがドリブルをして駆け回るたびに地面が揺れる。非難をするつもりはない、それはある意味正しい姿なのだし、自分もそのうちの一人なのだから。

私は妹と違ってどちらかというと運動の出来る方だった。こういう集団で行うスポーツでは常にチームの中核を担い、困った時には必ずパスを回される。私もそれは嫌いではなかったから、期待されればそれ相応の働きはした。

「亮子、パス！」

またパスが回ってくる。敵チームに固められた味方の一人が、もうどうにでもなれという感じでボールを放り投げた。一応こっちに向かってきてはいるが、あれでは届かない。ボールは弧を描き、誰もいないスペースに落ちようとしていた。敵の一人が目を光らせ、ゴール下からすかさず走ってくる。私も床を揺らして走り出した。大丈夫、こっちの方が距離は短い。確実に間に合うはず。

……ちゃん……。

「え？」

誰かの声が聞こえて、私は思わず足を止め振り返ってしまった。しかし後ろを向いてもいるのは観戦者ばかりで、そして彼女らは次の瞬間、ああーと一斉に非難のような喚声を上げた。私はあわてて前を向いたがすでに遅く、ボールは敵チームに取られてしまっていた。そして彼女はそのままドリブルし、ゴール下で難なくシュート。拍手と喚声が巻き起こり、味方チームのメンバーが私に駆け寄ってきた。

「ドンマイー」

「ごめんね取りにくいパス出して！大丈夫？」

「え、……や、こっちこそごめん、いつもなら取れるのに……」

いーよいーよと皆は私の肩を叩く。私は言い出そうか迷ったが、多少言い訳がましくなっても構わないかと思いい口を開いた。

「……ねえ、誰かパスの後私のこと呼んだ？」

すると皆は一樣にきょとんとした顔をして、各々首を振ったり傾げたりした。観戦者からも敵チームからも、私を呼ぶ声はなかったという。

空耳だったのだろうか。……でもあの声は。

「再開！」

ゴール下のラインから味方がボールを投げ、再び地面が揺れ始める。足音と喚声が耳から全身を震わせた。私はさっとコートを見回して、敵のゴール前へと駆けていく。あそこでパスを受ければ、確実にシュートできるはずだ。

「亮子！」

しかし駆けている途中、まだコートの手前を過ぎた辺りで味方からボールが飛んできた。困った時はすぐこれだ。私は例ならずいらつと来た。さっきのパスを受け損ねたことで焦っているのだ。

今度は真正面から受け取ることができ、そのままドリブルに移行する。目の前に敵はいない。後ろで他の味方を囲んでいたのだ。しかしその目は一瞬にして私を映すものに変わり、足音が一斉に私に集まってくる。私は振り向かず、ゴールに向かって一心に走った。ボールを持っていない足音は当然のように追いついてくる。

「走ってー！」

「シュートー！」

喚声に答えるべく、私はドリブルしたままゴール間でシュートを放った。汗ばんだ空気が張りつめ、皆がボールの行方を追う。ボールはリングに乗ったものの、その上を転がって外側に落ちてきた。

もう一本、と味方が叫ぶ。言われなくてもそのつもりだ。私はすかさずゴール下に移動し、落ちてくるボールを受け取ろうとした。

「……………えちゃん……………」

喚声に混じって、耳元で囁くような声が、再び私の動きを止めた。

「亮子！」

味方の叫び声が聞こえる。しかし耳をピンと張った膜が覆っているようで、脳の中まで響かない。ボールはなんとか私の手の中に落ちたが、私はシュートを放つどころではなかった。

囁き声は、耳の中から聞こえてくる。

「亮子、シュートー！」

「……………ちゃん……………おねえちゃん……………」

そしてこの声は……………。

「……………さい……………」

「え？」

一瞬、自分がしゃべっているのではないかと思った。自分が自分を呼んでいるのではないかと思った。なぜならその声は、私の声と全く同じものだったから。

しかし私が自分のことを あの子が私を呼ぶように呼ぶだろうか？

コート中、体育館中の空気がしんと静まりかえり、地面の揺れは止まっていた。敵も味方も、私の周りに集まっていた子たちは皆怪訝そうに私の顔を覗き込む。

……お姉ちゃん。

ボールが私の手から滑り落ちた。ダンダンと空気を震わす音を立てて、コートの外に転がっていく。誰もそのボールを見てはいなかった。全員が、異常な私に訝しげな目を向けていた。

お姉ちゃん……。

「……るさい」

私は両手で耳を塞いだ。しかし囁きは絶えず耳の中に残り、何度も何度も脳に反響している。私と同じ声。あつてはならない、聞こえてはならない、私と全く同じ声！

「うるさい！」

わたしを包む空気が、一瞬にして、確実に凍りついた。

「……亮子……？」

友人のかすれた声が、耳からクリアに入ってくる。私ははっと息を返し、両手を静かに耳から離れた。しんとした空間、その音が、くぐもることなく脳に入ってくる。皆が異常者を見るような目で私を見ていた。先生までもが度肝を抜かれたように私を見ていた。実際わたし自身自分が異常者のような気がしていた。そう思うと急激に頭が痛くなった。

「……先生」

私はその場から、コートの外にいた体育教師に言う。彼は動揺しつつも冷静さを装い、なんだと答えた。

「……気分が悪いので、保健室に行っていていいですか……？」

彼は二、三度かくかくと頷いたが、私はそれを確認する前にコートから出ていた。出口付近に固まっていた女子達が黙って道をあける。誰も私を止める者はなかった。ただ凍りついた眼差しで、寒空の下に出ていった私を見送っていた。

第三声

「精神的に不安定なんでしょう。妹さんのことで、疲れてるんじゃない？」

保健室には他に生徒はおらず、養護教諭の女性が一人だけいた。

他の教室では嗅げない、特有の薬品のにおい。入り口から入ると冷蔵庫やガスコンロ、電子レンジ、身長計や体重計、視力検査の器具などがあり、そこと空間を異にしてパイプベッドが四台ある。私は友人のジャージを着たままそのうちの一つに入り、彼女の言葉に浅く頷いた。

「心配でしょう。あんなに仲の良いご姉妹だったものね。私も麻子さんのことは良く知ってるから、気がかりよ」

「麻子は、保健委員でしたね……」

「ええ。積極的によく働いてくれるいい子だったわ」

養護教諭はベッドのそばに立って目を伏せた。まるで死んだ人を出しているような言葉だったが、まだ違う。この人を始め妹の友人達も、彼女の失踪をそれほど重大に受け止めていない。まさか死んだとは思ってもいないのだろう。彼女の失踪はもちろん教員全員が知っていたし、噂のお陰ではほぼ全校生徒が知っているも同然だった。しかし、十六歳なんて多感な年頃だ、家出の一つ二つしてもおかしくはない。どんな悲しげな言葉の裏にも、そんな気持ちが隠れていた。

「気分が良くなるまで寝ていなさい。担任の先生には知らせておくから」

「はい、ありがとうございます……」

私がしおらしく頷いてみせると、彼女はベッドを囲うカーテンを閉めて離れていった。仕事があるらしく、自分の机に向かう音が聞こえた。

私はごろりと身体を横に向け、静かに瞳を閉じた。とても眠りた

い気分ではなかったが、恐らく今日はこのまま授業に出ないだろう。教室に戻りづらかった。体育が終われば教室はこの話題で持ちきりになり、私は狂者のレッテルを貼られるに違いない。そこに寄せられるのは同情よりも好奇の目だ。下手をすれば村八分かもしれない。私は自分に対してため息をつかざるを得なかった。あんなところでうるさい、なんて叫んでは、友達に言ったようにしか聞こえないじゃないか。考えなくても分かることだ。

でも私は確かに聞いたのだ。妹が、麻子が、私のことを呼ぶ声を。

お姉ちゃんなんて呼び方をするのは妹しかいない。それにあの声、間違いない十六年間聞き慣れた彼女のものだ。

幻聴だろうか？それほどまでに自分のしたことに後ろめたさを感じているのか。私は一人、自嘲気味にふつと笑った。有り得ない。妹と貴平が付き合い始めたのを引き金にして、私の殺意は確かに募るばかりであった。だから私は、あんなにも無意識に、彼女を殺してしまえたのだ。

正直な話、私は彼女をどのように殺したのか鮮明には覚えていなかった。ただ、自分の手の血が止まるほど強くマフラーを引っ張って、彼女の細い首をちぎるように絞めた感触だけは覚えている。そこに至るまでどのように道を歩いて、先に帰路に就いた彼女をどうやって雑木林まで連れて行ったのかは分からない。気がついたら目の前に妹の死体があり、そばには土の付いたスコップと人を埋められるだけの穴があった。私はいささかの混乱を覚えつつ冷静に妹の死体をそこに入れ、埋めた。

何を後悔することがあろう？彼女は間違いなく目障りだった。世間はそのうち彼女のことを忘れ、私はまもなく一人っ子になるだろう。貴平の頭からも彼女の影は消え、同じ顔の私だけが残るに違いない。

廊下のスピーカーからチャイムの音が聞こえ、授業の終了を知らせた。皆は今から教室に戻るところだろう。それから　それから

のことは考えたくない。教室には戻りたくない。

「失礼します……」

チャイムが鳴り終わるか鳴り終わらないかのうちに、保健室のドアが開いた。薄いカーテンの向こう、男子生徒の声だ。と言うより非常に聞き覚えがあった。

「貴平？」

私は上体を起こし、ベッドの上から彼の名を呼んだ。彼は養護教諭と一言二言話すと、すぐに私のベッドを囲うカーテンを開けた。彼の目は体育館のクラスメート達と違って狂者を見るようなものではなく、沈んではいたが心底心配そうだった。私は思わずちよつと微笑んでしまう。貴平はベッドのそばの丸椅子を引いて座り、小さな声で話し始めた。

「授業中、体育館からお前一人出ていくのが見えて……」

養護教諭は黙って保健室を出ていった。気を利かせたつもりだろう。

「顔色悪かったから、保健室行ったんじゃないかって。こっちの授業早めに終わったからすぐ来た」

「そう……」

貴平が私を見つけてくれて、そんな風に考えてきてくれたことが嬉しかった。私は頬をゆるませたが、反対に彼の顔は暗く硬くなっていく。

「なあ、何かあったのか？気分悪くなっただけか？」

彼はまっすぐに私の目を見つめる。いつもこうだ。真剣に話をする時決して目を逸らさない。あの日曜日、私が彼に麻子じゃないと駄目なのかと聞いた時も、こんな目をして答えた。すると私は嘘をつけなくなるのだ。

今も、心の底を見透かすような鋭くまっすぐな視線を前に、私は自分を余儀なくさせられているようだった。

「……声が」

「え？」

貴平が瞬きをして首を傾げる。何も知らないその顔に私はあわててブレーキを掛け、ごまかすように笑って首を振った。

「なんでもない。ちょっと調子悪かっただけ」

「……？そうか」

うん、と頷いて彼から目をそらす。見てはいけない。見たらまた馬鹿な自白をしてしまいそうだ。

二人きりの保健室は穏やかに冷たく、電気ストーブだけがジージーと音を立てて真っ赤な熱を放っていた。時々廊下を生徒達のざわめきが通り過ぎるが、不思議と保健室に入ってくる者はない。静寂はその場にとどまり、私達の間を埋め尽くしていた。貴平は膝の上に組んだ手をじっと見つめたまま沈黙している。私もやり場のない緊張感を抱えて黙っていた。

「……なあ、こうしてるとさ、あの時のこと思い出すな」

唐突に貴平が顔を上げ、無理に作ったような明るい声を出す。私は顔だけを彼に向けて首を傾げた。彼は組んだ手を解き背中を伸ばす。

「ほら、中一ん時さ、お前がすげえ熱出しただろ。麻子がお前のベッドにしがみついて大泣きして……俺あいつのこと部屋の外にひっぱってつたけど、ほんと俺もお前がこのまま死ぬんじゃないかってびびってたんだ」

「ああ……」

そういうこともあった。中一の一月、私はインフルエンザでもなののに三十九度の高熱を出して寝込んだのだ。その時妹は、熱に浮かされる私のそばで死んじやだ死んじやだと言って泣きわめいていた。風邪を引く時はいつも二人一緒だったから、初めて片方だけが高熱を出して混乱したのだろう。私の母と貴平が、病人の身体に障るからと必死に彼女を部屋の外に引っ張り出した。それでもドアの向こうから泣き声が聞こえてきたものだった。熱で朦朧としていたはずなのによく覚えている。

「懐かしいわね。ついこの間のことみたい」

私が笑うと、貴平も弱々しく笑って頷いた。しかしその笑顔はすぐにはかなく崩れ、彼は再び組んだ手に額を載せてうつむく。

「麻子……どこ行っちゃったんだよ……」

嗚咽のようなつぶやきが、私の心臓を締め付けた。しかしそれは彼や妹への罪悪感のせいではない。自分でも分かるほど、自己中心的な感情だった。自己中心的な切なさだった。人一人殺してもなおこんな感情が湧き出るなんて、自己嫌悪する前に不思議だった。

口を開けば麻子麻子、どうしてあの子ばかり。

「……ねえ麻子は、」

保健室前の廊下を、男子生徒が数人げらげら笑いながら通り過ぎていく。自分が口を開いて何を言おうとしていたのか、正直なところよく分からない。ただ何か言って彼の意識を取り戻さなくてはと思った。きつと大丈夫よとか、すぐ戻ってくるわとか、そんな当たり障りのない慰めを口走ったかもしれない。

だけどそれは叶わなかった。遠ざかりつつある男子生徒の笑い声が急にくぐもり、耳を再び薄い膜が覆ったのだ。

そして、

お姉ちゃん……。

「……あ、」

強く、耳を塞ぐ。無駄なことは分かっていたが、塞がずにはいらなかった。貴平が訝しげに首を傾げ、私の顔を覗き込む。私は歯を食いしばった。体中体温が蒸発していくようで、腕が小刻みに震えていた。

見ないで！

お姉ちゃん……出して……。

「亮子？亮子、大丈夫か？」

貴平の手が私の手首をつかむ。その皮膚の温かさを、私はとつさに振りほどいた。触らないで、聞こえるの、あの子の声が。思わず出そうになる言葉さえ、震える喉に邪魔されて滞っている。

とても寒くて……冷たいの……。

「……うるさい……」

「亮子？」

頭の皮膚に爪を立てる。この耳を引きちぎってしまいたかった。引きちぎって、穴さえ埋め尽くして、何も聞こえなくなってしまう方がいいのに！

視界の端で貴平の顔がぶれる。どんな表情をしているのか分からない。

「うるさい、うるさいうるさいうるさい！黙ってよ！」

金切り声が頭蓋骨でこだまして、それさえもうるさかった。気を失えたら！ぷつりと気を失えたら、どんなにか楽だろう！頭が熱くて、そのくせ手は震えて、爪は皮膚に食い込んでいく。痛みはないただうるさかった。何もかもがうるさいのだ！

「亮子、落ち着け！何言ってるんだ！」

貴平の両手が、さっきの何倍もの力で私の両手首をつかむ。無理矢理耳から手を引きはがして、ベッドの上に押しつけた。気味悪がりも面白がりもしない、真剣に焦った目が、真正面から私をとらえる。私の体はびくんと大きく震えて、それきり手の震えは止まった。歯の隙間から漏れる呼吸は荒々しく、それでも耳を覆う膜は破れていた。私の目に正気が戻ったのを見ると貴平も大きく息を吐き、手を離して立ち上がる。

「……疲れてるんだろ。今日はもう帰ろう、な？俺も一緒に帰るか」

貴平が帰る必要はない 私はそう気付いていたけれど、黙ってこくりと頷いた。彼と一緒に帰ってくれるというのなら、これ以上

ここにいる必要はない。貴平は頭を掻きながらカーテンを開けた。薬品のおいが強く鼻をつく。

「教室戻って、荷物まとめてくるから……。お前も着替えなきゃだろ。……とりあえずここ出ようぜ」

それで私は、自分が他人のジャージを借りていたことを思い出した。妹のを借りておけば返しに行く必要もなかったものを、馬鹿な意地を張ってしまったと後悔した。

第四声

私が教室に入った瞬間やっぱり空気が凍りつき、一秒あって皆よそよそしくそれまでしていたことの続きを始めた。更衣室で着替えを済ませた私はジャージを友人に返し、荷物を取りに教室に来たのだ。普段仲良くしている何人かは「大丈夫？」「帰るの？」「お大事にね」などと言って近づいてくるが、やはりよそよそしさが隠せていなかった。私もよそよそしい笑顔で、うん大丈夫、ありがとねなどと言って早々に教室を出た。ひどく息苦しかった。

貴平は適当な理由を友人に告げて、先生には黙って出てきたらしい。私達は校門で待ち合わせをして、それから一緒に歩いた。最初に一言二言話ただけで、後はほとんど無言だった。

歩きながら彼が何を考えていたのかは分からない。しかし確実に、私と彼は別のことを考えていた。私は 恐らく私にしか聞こえていない、あの妹の声について考えていたのだ。

私は幽霊など信じていない。しかしテレパシーのようなものは信じていた。有り得ない話じゃないと思うのだ。ただし私と妹のような、極めて近い肉親に限り。

私達は元は一つの細胞だった。同じDNAを持った、一人の人間だったのである。この世に生まれ出でた時には別々の身体になっていたが、強い感情の片鱗くらいお互い感じ取れても不思議はない。実際そういうことは間々あった、特に幼い時に。妹が泣けば私も泣く、私が泣けば妹も泣く。成長とともにそれは薄れてきたが、あれは一種のテレパシーと考えられるだろう。

あの声が、妹本人のものだとしたら。

私は灰色の空を仰いで、白い息を吐いた。平日昼前の道に人はおらず、二人分の暗い足音が不愉快に響く。雪をこらえた雲は相変わらず重い。この空の下に、妹は一人眠っている。

麻子はまだ、土の中で生きている？

馬鹿らしい 私は小さく首を振った。あの時彼女の死は確認したし、第一埋めてからもう一週間経つのだぞ？今頃はバクテリアにでも食われて土の栄養だ。出して、なんて言われても、どうしようもない。

気が狂いそうだ。彼女は何を望んで、私に声を送るのだろう。

「シーザー？」

不意に貴平がつぶやいて、私と反対方向に顔を上げた。私も灰色の空から目を離し、貴平の視線の後を追う。見ると、左手の民家の塀の上を、黒ぶち模様の太った猫がとことと駆けてきた。貴平の家の飼い猫だ。かのローマ將軍ユリウス・カエサルから名前を取ったらしいが、すでに私達より長生きしている年寄りで、とても將軍という風貌ではない。私達を後ろから追いかけてきたらしく、一度追いつくと同じ歩調でのそりのそりと歩き出した。たまにこつちをちらつと見ては、ぷいと前を向いてそれでも一緒に歩く。貴平は苦笑しながら、お前また太ったんじゃないのかと冗談めかして言った。猫に人語が理解できるとは思えないが、シーザーはちょっと不愉快そうな顔をしたように見えた。

実を言うと、私はこの猫があまり好きではなかった。まだ私達が五歳の頃、貴平の家で遊んでいる時、妹がこの猫に腰を引つ搔かれて怪我したのだ。夏で薄着だったせいもあり傷は結構な深さで、死ぬまで妹の体に残っていた。貴平はシーザーを泣きながら叱り飛ばして、子どもながら土下座までして謝った。貴平の両親も、当初は会ったたび会ったび頭を下げてきたものだ。

思えば貴平には、あのことに對する罪悪感があつたのかもしれない。その罪悪感故に妹のことばかりが気にかかり、私を見なくなつたのかもしれない。

そう思うとつくづくこの猫は憎らしいものだ。私は貴平に気付かれないように、まるまる太った老猫を睨みつけた。猫はちらりと私を一瞥したが、つんと鼻を上げて無視を決め込んだ。

私達の家が近づいてきた時、私は家の前に白いパトカーが一台停

まっているのに気付いた。シーザーのお陰で和らいでいた貴平の顔も、すぐに凍りつく。警察がうちに来ている。恐らくこの時も、貴平と私は別な風に考えていたに違いない。妹に関する新しい情報が入ったのかという期待と、まさか死体を見つけられてはいないだろうなという不安。

「おや、亮子さんに貴平君。お帰りが早いんだね」

家の前に警官は二人おり、私の母が出て対応していた。すっかり顔見知りになった二人の警官は、私達を見て敬礼する。私と貴平も軽く頭を下げ、そして貴平が真っ先に食らいついた。

「あの、何か進展はあったんですか？麻子の居場所は……」

「まあまあ、焦っても何もいいことはないよ。落ち着こう。……今日は再度聞き込みに来たんだ。丁度いい、君達にもまたお話を聞けるかな？」

「聞き込みですって？」

今度は私が前に出る。予想外に怒気のコもった声になってしまったが、この際その本心を上手くごまかして利用してやろうと思った。

「私達はもう十分話しました！今さら何を聞こうって言うんです？そんなことをしている暇があったら、一刻も早く妹の居場所を探し出してください！」

「こら、亮子……！」

気弱な母が止めに入るが、私はこの警官達がこの程度で怒る人ではないことを知っている。予想通り彼らは業務的に笑い、なだめすすように両手を上げた。

「気持ちちは分かるけどね。それでもこっちは一生懸命やってるのさ。頼むから協力してくれないかな？」

予想していた言葉ではあったが、私は心の中で舌打ちをした。捜査の初期段階で聞き込みはさんざんされた、もちろん母や貴平もだ。私はできるだけ不自然でない作り話をし、未だに私が犯人扱いされないところを見るとそれは成功しているらしい。しかしできれば二

度と話したくはないことだ。作り話だけに、話せば話すほどほころびが見つかる危険をはらんでいるのだ。

だが怪しまれないためにも、ここは承諾するしかない。私は頷いて、これからされる質問に答えるべく完璧に暗記した作り話を頭の中で再生し始めた。

『あさこねえ、うさぎさんにする。おねえちゃんは？』

『わたし……も、うさぎが、いいなあ』

『えーっ、それじゃおんなじになっちゃうよ！わかんなくなっちゃうよ！だめだよ！』

『……じゃあ、くま、にする』

『うん、そーしょー。ママ、あさこがうさぎさんでおねえちゃんがくまさんね！』

妹の部屋のぬいぐるみに、懐かしい光景を見た。

確かあれは四歳の時　自我が芽生え始め、自分の好みも分かりかけてきた頃。あの頃からすでに、妹の無邪気さは私から沢山ものを奪っていたのだ。もっと早く気付いていれば　私の中にあるのはそんな悔恨ばかりだ。

妹の部屋はピンクを基調とした可愛らしい部屋だ。間取りは私と同じ、家具も私のものとほとんど変わらないのに、置いてあるものが明らかに違う。私は本棚を本棚として使っているが、妹はぬいぐるみの陳列棚として使っていた。何か香水がまいてあるのか、甘ったるいにおいがする。

手に取ったうさぎのぬいぐるみは、あどけない黒い瞳で私を見ていた。もう十二年も前のものだから、白い毛は灰色に変わっている。それでも妹は大切にこれを取っていたのだ。私から奪い取ったこのうさぎのぬいぐるみを。

私はそのぬいぐるみの両腕を引っ張った。糸はもろくなっており、それは女の力で簡単にもげた。その腕を手の中に握り締めたまま、

今度は足を引っ張る。両足も簡単に取れた。最後に頭と胴体を引っ張ると、それさえもあっけなく分離する。なんてもろいものなのだろう。こんなもろいものを大切にとっておく彼女の心が、悪意のようには私の心をえぐる。私はばらばらになったぬいぐるみをゴミ箱に投げ捨てて、室内を見回しながらゆっくりと歩いた。机の上には柄物のシャーペンや消しゴムが転がっていて、左側には教科書が少しだけ積み上げられている。くまの置き時計や布のティッシュケース、キャラクターものの卓上カレンダー。机の本棚には教科書やノート他に、料理の本やファッション誌が置いてあった。実に　女の子らしい。

その本棚の中にはアルバムがある。生前の妹と一緒によく見たから、どれに何が入っているかは大体知っていた。アルバムは四冊あり、背表紙に年代がきちんと書き込まれている。私はそのうちの一冊、最も新しいものを抜き出して何を見てもなく適当に開いた。そしてそこに出したのは、中三の修学旅行の写真だった。新緑の頃、清水寺を背景に笑顔とVサインを見せる私達三人。同じ顔なのに全然空気の違う私達姉妹。その間に立つ貴平。その笑顔が妹だけに向けられていたなんて、当時の私は愚かにも知らなかった。ただ馬鹿みたいに幸せそうに、今ではもうできない無邪気な笑顔を力メラに向けていた。

吐き気がする。

無邪気、ほど怖いものはない。もし妹があれば無邪気でなかったら、私は妹を殺さなかったかもしれない。いつか妹の無邪気さに取り込まれてしまふ気がしてならなかったのだ。あの無邪気さに何もかも奪われて、私には何も残らない人生が待っているように思われて仕方がなかったのだ。

だから、私が殺した。

私はアルバムを閉じ、元のように本棚に戻した。これ以上ここにも何にもならない。数十分前にあの警官達が帰ってから、私はずっとここにいた。自分の部屋に帰る気が起きず、制服のままここ

でぼんやりしていた。しかしぬいぐるみを捨てて少しだけ気が晴れた。もうここにいる必要はない。

私は何事もなかったかのように部屋を出ようとした。貴平は自分の家に帰り、母はリビングでぐったりしている。誰も私を見たものはない。はずだ。

しかし。

お姉ちゃん……。

「！」

ドアノブに手を掛けようとしたところ、また頭の中で声がする。私はとつさに耳を塞いだ。しかしそれが意味を成さないことはもう分かっている。そして。今回ばかりは、わたしはいやに冷静だった。喚いても怯えても、この声に対処できないと言うのなら。

「……麻子？」

ドアに背を預け、一人つぶやく。耳から手はずすと掌がじつとりと湿っていた。部屋の中、視線を泳がせても当然妹の姿はない。しかし聞こえる、確かに、彼女の声が。

……お姉ちゃん……聞こえてるのね……。

「……ええ、聞こえるわ。麻子、ずっと呼んでたのね……」

お願い、ここから出して……。暗くて冷たいの……。

「私にできると思ってるの？」

ぼんやりと、私の目の前に私の姿が浮かび上がる。私。いや、妹だ。私と全く同じ格好をした、鏡に映った私のような。しかし彼女は悲しげに目を伏せ、じっと私を見つめている。私は血がにじむほど唇をかみしめ、ドアに爪を立てて吐き捨てた。

「私は殺したのよ、あなたを！そしてそれを隠し通すつもりでいる……どうしてわざわざ掘り返すような真似をしなくちゃならないの？少しは考えてちょうだい！」

妹は陰鬱な顔でうつむいたまま、黙っていた。長い前髪から覗く瞳に生气はなく、しかし、やけに強く私をとらえている。私も負けじと黙っていた。まだ生きているこの目で死んだはずの彼女を睨みつけ、心の中で消えろ、消えろと念じながら黙り込んでいた。

妹の姿が見えるはずはない。これは幻覚なんだ　私の自覚していない罪悪感が生んだ。

ややあつてその幻覚はゆらりと揺れ、一瞬姿がかすんだ。かと思えばその目はいつそう力強く黒く光り、水気のない唇がわずかに開く。

続かないわ。

「……え？」

妹は確かに声を発した。ドアに張り付いた背中に汗がにじむ。首がろつで固められたように動かない。彼女はくつと顔を上げ、氷のような冷たさを持ってさらに言った。

続かないわ。あなたのしたことは、いずれ必ず明るみになる……。その時の苦しみを軽減させるために、わざわざこつて呼びかけているのに……。応じないって言うのね。

「……何訳の分からないこと……」

もういいわ。分かった。お姉ちゃんがそついう態度で来るなら、こつちにも考えることがあるから……。

「麻子？ちよつと、」

さようなら。

妹の姿が壊れたテレビ画面のように大きく歪み、電源を切ったようにぷつと一瞬にして消えた。

「麻子……？麻子！」

彼女の名を呼び、部屋の真ん中へ歩み出ても、返事は返ってこない。机の前にも、ベッドの上にも、本棚の前にも、ドアの前にも、妹の姿はどこにもなかった。

消えた？ いや幻覚なのだから当然のことだ。しかし私の全身は汗でじつとりと濡れ、冷たい空気に急速に冷やされていた。ぞつとする。あんなリアルな幻覚、それに、あんなに自分に不都合な幻覚、見たくもなかったのに。

続かないわ。

冷たく発された彼女の一言が、頭蓋骨の中をぐるぐる回る。

私は再びドアに向かい、今度こそ部屋を出ようとした。途中、ゴミ箱の中のうさぎの頭が澄んだ目で私を見据えていて、生きた心地がしなかった。

第五声

翌日、私は平常通りの時間に起きて学校に行く支度をした。今日の母はいつにもましてぐったりとしているし、父は相変わらず幽霊のように家を出ていった。私も母から昼食代を受け取り、家を出る。貴平が門の横で待っていた。

「おはよ」彼はまずそう言って、「何か進展あった？」と聞いた。今朝はできればその話題から切り出して欲しくなかったな。そう思いながら私は首を振って歩き出す。「何も」

心境が顔に出ていたのか、後を追ってきた貴平は心配そうに顔を覗き込んできた。

「疲れてるか？」

実際私は疲れていた。警察と話すなんてそれだけでも気力を使うし、幻と言いつ争いまでしたのだ。本当なら今日は家で寝ていたいところだ。

しかし何より あの幻が言った、あの言葉が気になって仕方がなかった。

続かないとはつまり、このまま波風立たぬ日々は続かないと言うことだろう。実に挑戦的で、挑発的な言葉だ。ならば私はいつも通りの生活をし、続くことを証明するのみ。そのために今日学校へ行く。

私は貴平に向かって微笑み、首を振った。

「大丈夫。心配してくれてありがとね」

貴平は何だかばつ悪げに顔を逸らした。それきり、私達はやっぱり無言で歩いた。

教室の前で貴平と別れ、私は四組のドアを開ける。教室にはすでに半数以上の生徒が来ていて、各々談笑したり勉強したりしていた。できれば気付かれずにそっと入りたかった 昨日あんなことがあ

ったから　が、がらがらとドアの開く音には全員が反応する。丁度いい位置にいる者は絶対に一瞥はする。そして奇妙な間が生まれるのだ。私は今日、その間が何よりも怖かった。いつも通りにおはようと言えるか分からなかった。

かくして間は生まれ、教室内が凍りついた。それまでここを埋めていた話し声が途切れ、視線が私に集中する。私は気付かれないように唾を吞んで、いつも通りの笑顔を浮かべて「おはよう」と言った。

いつもなら間はそれで終わる。

しかし今日は、空気が凍りついたままだった。

皆が私を見ている。だけど誰一人挨拶を返さない。ある者はしらっとした目で、ある者は困惑した目で、ある者は嫌みっぽく笑った目で、私を見つめるだけなのだ。私は急に、単独で敵地に赴いた兵士のような気分になった。作った笑いは一気に剥がれ落ち、うつむき気味に自分の席へ向かう。その周りで談笑していた男子達が、好奇の目を向けながらささっと避けた。しかしただそれだけで、私に話しかけようとはしない。

平静を装って鞆を下ろし、中身を机の中に移し替えながら、私は内心冷や汗をかく。

何、この異様な雰囲気は？

クラスメート達が私を無視している。存在に気付きつつも、一方的に観察するように無視しているのだ。これではまるでいじめの対象　冗談じゃない！本当に村八分になるなんて　しかし昨日のことが絡んでいるのは明らかだ。

ひとまず大人しく席について、勉強するふりを始める。本当はともそんな気分ではなかったけれど、手持ちぶさたでは居心地が悪い。どちらにしろ、昨日早退した後の授業の内容に自力で追いつかなければならなかった。あの後あった中で重要なのは、数学と英語。私はまず数1の教科書を開き、この前やったところの続きから読み始める。周りの雑音には耳を塞いで。

と

「っ！」

こつつ、と突然、小さなものが額にぶつかってくる。大した硬さではなかったが結構な勢いがあり、その一点がずきずき痛んだ。それは教科書の上に落ち、真ん中の溝に転がり込む。消しゴムのかけらだった。顔を上げると、私の席の近くで談笑していた男子がこつちを見てにやにや笑っていた。

羞恥のような怒りが、腹の底からこみ上げてくる。

「なんの真似よ！」

私が立ち上がって怒鳴ると、彼らは声を立てて笑った。教室中の視線が再び私に集中する。恥ずかしくて倒れてしまいそうだった。

「女王様ご立腹だぜえ！」

「またうるさいって喚き出すぞお！」

彼らはそんなことを言ってげたげた笑う。教室の隅で傍観している連中も、思わず吹き出さずにはいられないようだった。

「何の話よ？女王様ってどういうつもり！」

私が怒れば怒るほど、彼らは愉快でたまらないらしい。わざとらしく目を丸めて顔を見合わせ、とても嫌な感じのする口調でこう言った。

「あれえ？昨日の体育の時間、シュートが決まらなくて周りの女子に当たり散らしたのはどこのどなただったかなあ？」

「そうそう、いきなりうるさい！ってな。ずいぶんな逆ギレっぷりだったって評判だけど？」

「なっ……」

体中に衝撃が走る。昨日のことが絡んでいるとは思った。だけどもさか、まさか そんな風に取りられていたなんて！まだ狂者扱いされる方がまだ、哀れまれる分だけ。

「ご、誤解よ！それは皆に言っただんじゃなくて……」

「じゃなくて？」

男子のうちの一人がふんと侮るように顎を上げる。

「じゃなくて誰に言ったんだよ？」

「それは……」

言えるわけない、こんな奴らに。妹の、死んだはずの妹の声が聞こえただなんて。

私の沈黙を敗北と受け取ったのか、彼らは再びげたと笑う。

「ほら見る。女王様じゃねえか！」

彼らの哄笑に混じって、クスクスと聞こえる傍観者達の笑い声。その中にはバスケットと同じチームだった子達もいる。彼女らの目は冷たく、こう言っているようだった。いい気味。私達にあんな態度取るから、こうなるのよ。

視界がぐにやりと曲がり、波打つようにゆがんでいく。両足は床についているはずなのに、底なしの闇の真ん中に放り出されたようだった。声が、音が、黒く広がって、私の身体を覆い尽くす。

「やめて……」

私は今度こそ耳を塞いだ。妹の声ではないのだから、こうすれば聞こえなくなるはずだ。しかしクラスメイト達の笑い声はやまず、それどころか、私を罵倒する声すらも脳内に響き始めた。どんだけ偉いつもりなんだよ、妹失踪したからって何しても許されると思ってたのか？ 実は失踪した妹ってあいつが殺したんじゃないの？

殺したんじゃないの？

「もうやめてよ！」

金切り声に鼓膜が震える。爪が頭皮に食い込み、生ぬるい血が首筋へ伝った。まぶたが引き裂かれたように開き、黒目を世界に飛び出させながらも、私の目には私を覆う黒い影しか映っていないかった。

ああ麻子、麻子！ ようやく邪魔がいなくなったと思ったのに、どうしてあなたは死してなお私を苦しめるのよ！

クラスメイト達の笑い声と、昨日聞いた妹の言葉が頭の中で混じり合う。その中で一つだけ、やっぱり私を捕らえて離さない言葉があった。

続かないわ。

その一言だけが、脳の一つ一つのしわを光速で駆けめぐる。そして私の脳細胞を一つずつ踏みつぶしていくようだった。

第六声

麻子という人間が私の将来を奪っていくのなら、私は麻子という人間を完璧にこの世から抹消しなければならない。

笑い声を背に学校を飛び出した私は、まっすぐ自宅へと駆け抜けていった。何も見えなかった。道路には人が何人にて、どんな顔で私を見ていたかとか、自分は信号機を渡ったのかとか、全然分からなかった。ただ目の前に一本の道があり、私はそれだけを全力で駆け抜けた。熱と冷気の境目で皮膚が痛む。肺がえぐられるような苦しさを伴っても、私は家まで走らなければならなかったのだ。

家の鍵は開いており、母がいた。私が飛び込んでくるとさすがに驚いたらしく、「どうしたの？」とリビングから姿を現す。しかし私は首を振り、「なんでもない、具合悪くて早退」、「これから部屋で休むから、二階に来ないでね」とだけ言って階段を駆け上った。妹と私の部屋が並ぶところ。私はまず自室に入り、ゴミ袋を数枚ひつつかんで、妹の部屋に向かった。

昨日とほぼ変わらないように見える部屋。ただ一つ、古いうさぎのぬいぐるみだけが本棚から消えていて、肢体をばらばらにされてゴミ箱に葬られている。

私はゴミ箱を覗き込んだ。澄んだ黒い目が、じっと私を見据えている。

腹の底にどす黒い怒りがこみ上げてきて、私はその目をもぎ取った。駄目だ、こんなものではない！

こんなぬいぐるみ一つ捨てたところで何になるう？やるならば徹底的に、何もかも捨てなくては！

黒い大きなゴミ袋を広げ、本棚に向き直る。丁寧に陳列された可愛らしいぬいぐるみ達。どいつもこいつも、汚れを知らない目をして私を見る。

見るな！

右上の猫のぬいぐるみを鷲掴みにして、ゴミ袋に叩き入れる。続いて犬、ペンギン、ネズミ、と　最上段右から次々に放り込んだ。そこが終わったら次はその下。無垢な顔の動物たちを、ブラックホールのようなゴミ袋に詰め込んでいくのだ！

一つ、一つと叩き込むうちに、私の中の麻子という人間像が足下からぼろぼろと崩れ落ちていく。もろい粘土細工が壊れていくように、ぼろぼろと、ぼろぼろと。私はそれが愉快でたまらなかった。消えていく、私の中から麻子という存在が！　ぬいぐるみを全て捨てると、彼女の膝から下がなくなった。それでも彼女は立っている。

まだだ。

からになった本棚を離れ、机へ向かう。シャープペンや消しゴムなんて、よく校門の前で塾のチラシと一緒に配っているのに。わざわざ三百円もしそうな可愛いシャープペン！　私はそれもぬいぐるみと同じゴミ袋に放り込んだ。消しゴムも、蛍光ペンも、積んであった教科書も全部、机の上にあるものは全て放り込んだ。くまの置き時計や布のティッシュケース、キャラクターものの卓上カレンダー、全て同じゴミ袋だ。ここまで来るとさすがにゴミ袋も一杯になってくる。これから本を入れる余裕などない。私は一杯になったものを入り口に置き、もう一枚新しいものを取り出した。同じ真っ黒のゴミ袋だ。それに本棚の本を片っ端から投げ入れる。本や雑誌は本当はビニール紐で縛って出さないといけないのだけれど、そんなことはどうだっていい。私はとにかく今、目の前に見える麻子の像を崩さなければならぬのだ。

教科書、ノート、料理本、ファッション誌。無造作に全てを投げ入れる。可愛い字も、テスト前に引いた蛍光ペンも、頭を出す付箋も　彼女の軌跡の全てをかき消すように捨ててくれる。彼女の脚は完全に崩れ落ち、腰から上のみが私の目には見えた。いい調子だ。このまま何もかも捨ててしまえば、彼女の姿は完全に消える。

私は次、次と本棚のものを手に取っては捨てた。しかし教科書もノートも料理本もファッション誌も捨て終えた後、自分の手に取ったものに動きが止まる。アルバム。あの子が綺麗に整理し、取って置いた数々の思い出。

この中には私の姿がいくつあるのだろう。生まれた瞬間からいつも一緒だった、同じ遺伝子の違う人間。ともに泣き、笑い、育てられたはずなのに、いつどこで私だけ道を違えたのだろう。妹の無邪気さがどうして私にはないのだろう。

彼女が 奪った？

私は四冊のアルバムを一度に引き抜き、極めて乱雑にゴミ袋に放り込んだ。ぼろり、ぼろりと妹の身体が崩れ落ちる。脚がなくなっても、腹がなくなっても、彼女は極めて無表情だ。今、妹の身体は胸から上しかなくなった。それでも彼女は立っていて、暗い瞳でじっと私を見つめている。

忌々しい。

私は大仰に舌打ちをする。アルバムを捨ててもまだ消えないというのか。いつそのこと部屋に火をつけてしまいたいくらいだ。しかし私の理性はそこまで失われていなかった。私は至って冷静に、次はクローゼットの中身をゴミ袋に詰め始めた。

その間中一回も、妹の声は聞こえてこなかった。

妹の部屋にある一切のものは、私によってゴミと認定された。

もちろんベッドや机、本棚なんかはどうしようもない。ただ持ち上げてゴミ袋にぶち込めるあらゆるものは現在黒い袋に閉じこめられていた。ぬいぐるみも、本も、文具も、服も、化粧類も、アクセサリーも、CDも、全て。

しかし 私のいらだちは最高潮に達していた。

「……なんで……」

ギリ、と唇を噛むと血の味がする。目が乾燥してじりじりと痛んだ。それでも私は瞬きをすることができない。

なんで。

「なんで消えないのよ……！」

肩から上のみの妹は、一貫して沈黙していた。悲しげな唇は一度たりとて開かれず、長い睫毛が真つ黒の瞳に影を落としている。彼女は常に私の脳内に、私の方を向いて立っていた。網膜に張り付いたように私の目の前に常に姿を見せていた。

まだたりない。この部屋だけでは、彼女の軌跡を全否定するにはたりないのだ。

私はゴミ袋をそのままにして、憤然と妹の部屋を出た。自分の部屋に戻りベッドの上に倒れ込む。必要なものを必要な分だけ置いた、シンプルな部屋。暖房をつけていなかったせいで空気が冷え切っている。

冷えた布団に頬を埋めると、自分の身体がずいぶんと熱を持つていることに気付いた。静かにまぶたを下ろし深呼吸をする。すると不思議なことに妹の姿は見えなくなった。もう一度目を開いてみても、網膜に張り付いたあの子はいない。どうやら彼女の部屋を出た時一緒に消えたようだった。

しかしそれは私の中の彼女が消えたことにはならない。恐らく彼女はあの部屋にとどまっているのだ。私の目にはそれが見えるだけ。今再びあの部屋に行けば、変わらぬ姿が見えるに違いない。

私は深く眉を寄せ、再びまぶたを下ろした。鼓動が次第にペースを落とし、四肢が重力に引つ張られて布団に埋まった。全身が重い。急な労働に疲れているのだ。

猛烈な眠気に襲われながら、私の脳は緩やかな思考を続ける。

あの子を、麻子の存在を消し去るためには。

窓の向こうから学校帰りの小学生の声が聞こえてくる。無邪気さをさらけ出した、痛々しい笑い声。その声が耳から脳へ入り、私の思考と溶け合った。

あの子がかつていたところへ。

思考はやがてとろりとした液体になる。布団の上に流れ出し、私

の意識は緩やかに閉ざされた。

第七声

朝の冷気が私を歓迎しているかのようだ。

午前六時。辺りはまだ薄暗く、人のいない道と眠った家々はひっそりとしている。幸いなことだった。今の私の姿を見て不審に思わない者はないだろうから。

露わになっている脚が冷えて、ぶるりと全身が震える。私は学校の制服にコートを着込んだ、いつも通りの通学ルックをしていた。

服だけは。

ずず、とアスファルトを擦る音が立ち、私はあわててそれを地面から浮かせた。静寂に包まれた住宅街には、どんな些細な音も大きく響く。ましてや六時という時間、起きている者は起きているだろう。不審な音に窓の外を覗かれたらひとたまりもない。

右手に提げたそれを、抱き締めるように前に持つ。思ったより重いのには最初面食らった。頬に当たるとひやりと冷たい。

金属バット。

私は今日、鞆の代わりに家の下駄箱に入っていた金属バットを持参していた。父が昔野球をやっていたらしく、捨てられずにずっと取ってあったのだ。使い古しだから当然綺麗ではないが、私は球を打つためにこんなものを持ち出したわけではないのだから関係ない。

こんなもの取っておいてどうするんだ、と常々姉妹で文句を言っていたが、今は父に感謝したい気持ちだった。良いものを取っておいてくれてありがとう、お父さん。

お陰で私は妹の幻影から逃げられるかもしれないわ。

道は無言で私を学校へと誘う。校門は閉ざされていたが鍵は開いており、必要最小限の幅だけを開けて忍び込んだ。もう通勤している教員もいるのか、駐車場には車が二、三台停まっている。しかしやはり人の姿はなく、誰もいない校舎はまるで異世界のように、背

筋がぞつとした。

でも私はやらなきゃならない。私を、私の未来を救うために。下駄箱を素通りし、土足のまま廊下にかかる。一刻も早く、誰にも見つからないうちに、事を済ませなければならぬ。階段や廊下の電気は当然ついておらず、窓からは朝日も差し込まず足下がおぼつかない。私は冷たいバッドを右手に提げながら、息を殺して一段一段上つていった。目指すところはただ一つ。そして私の目的は果たされる。

冷え切つて冴え渡つたいつもの廊下。静けさが私を焦らせる。目的の教室の鍵は開いていた。からからから、と心臓に悪い音を立ててドアを開き、静寂に足を踏み入れる。整然と並べられた、木の板と鉄の脚でできた狭い机。薄暗さの中に禍々しく光る、私の目的地、倒すべき相手。

窓際の前から三番目、一番目当たりがよくて、誰よりも彼女に似合っていた席。

バットを握る手にぐつと力がこもる。全ての憎しみがそこに集結していく。

私はそのとき、自分の顔が歪んでいくのに気づけなかった。

壊れればいい。

冷えた脚が無意識のうちに机へと向かう。バットが辺りの机とぶつかつて耳障りな金属音を立てた。机の横にはジャージの袋が掛けてあり、彼女がいなくなった日から何も変わっていない。

私はぱつと腕を振り上げて、叩き割るように机の中央を殴りつけた。

ガキン

冷たくて、鋭くて、皮膚を刺すような音が、神経にじんじん響く。

しかし机はと言うとほぼ無傷で、表面に少しひつかき傷のような跡がついただけだった。

まだだ。

私は再びバットを振りかざし、板を打ち付けた。腕の骨を走る衝撃。歯を食いしばり、打つ位置を変える。細い脚の部分。鉄ではあるが、さほどの硬さではあるまい。しかし横殴りにすると、机はがごと移動してしまった。窓の下の壁にぶつかり、怯えるように音を立てる。いじめっ子はこんな気分なのかなと何となく思った。抵抗しない弱者を、ひたすら殴りつける拳。さしずめ私は、鼻血を出してうずくまり、涙を浮かべて許しを請ういじめられっ子を見下ろすいじめっ子だろう。助けてください、もうやめてください、何でもしますから 誰のものともなくそんな声が聞こえてくる。

誰がやめるんですか。

口元がゆがみ、更なる一撃を加えるべくバットが振り上げられる。私はまた脚を狙って殴った。壁際に追いつめられた机にはもう逃げ場がない。金属同士がぶつかり合う鈍い音が、沈黙する空気を脅すように響く。私はひたすらに殴った。古いバットのグリップを握り締めて、親の仇でも討つかのようにひたすら殴った。壊さなきゃいけない。この机を壊して、妹の全てを消し去らなければならぬ！

「消えろ……」

机の悲鳴に紛れて、自分のものでないようなつぶやきを聞く。それは恐ろしく冷徹で、冷静で、憎しみに満ちていた。

消えろ。

「消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！」

悲鳴は心地よく、私はそれが聞こえるたびに甲高く怒鳴った。真上の窓ががたがたと震えている。私に畏怖しているのだ。机の脚は徐々にへこみ始め、いよいよ折れる寸前だ。これでいい。口元がゆがみ、笑みが宿る。これで私は救われる。麻子の像はもろくも

崩れ去っていくのだ！

「何をしている！」

しかし悲鳴は男の怒鳴り声にぴたりとやんだ。

私は振り上げたバットを静かに下ろし、声のした方を振り返る。開け放していた教室のドア。顔だけは知っている男の先生が、青ざめながらこつちを見ていた。そして私の顔を確認すると、いっそう驚いた様子で教室に踏み込んでくる。

「お前、一年の双子の……？こんな時間に何してるんだ！」

私は露骨に嫌な顔をした。双子の、か。やっぱり私達は二人一セツトで覚えられているんだな。私は片割れを消すのに必死だというのに。

先生は小走りに私に近づいて、その有様にぎよっとしていた。無理もない。早朝の学校で金属バットを使って机をリンチする女子高生、そんな奴が私以外にどこにいる？日本中を探してもそうはいまい。机は右の脚が曲がり、傾いていた。あと一息で完璧に折れていったというのに、邪魔してくれて。

「そ、その……バットを下ろせ！早く！」

大の男が小娘一人に恐怖し、状況の異様さに震えている。私は不思議と愉快的気持ちになった。そしてここで言う通りにしてしまっ
てはつまらないという悪意が芽生えていた。

「……嫌、です」

頬の筋肉が笑みの形に引きつる。眉をひそめた彼を後目に、私は再びバットを振り上げた。

「こ、こら！やめないか！」

先生の悲鳴と机の上げた最後の悲鳴が、爽快なハーモニーを奏でた。

机の脚はこの一撃で完全に折れ、傾いたままその場に崩れ落ちた。片足を折られて立つこともできなくなった哀れないじめられっ子。窓から朝日が差し込み始め、その光景を美しく照らし出す。私は純粹にほっとした。バットを握る手から力が抜け、からんと床に落ち

る。勝った。私は勝ったのだ！このクラスからもあの子を消し去ることに成功した！

しかし安堵したのも束の間、私の腕を熱っぽい大きな手が強くつかんで引く張った。先生は顔を青ざめさせ、妖怪でも見るような震える眼球でそれでも必死に私を睨んでいた。

「……来なさい。早く！」

この人はいったい何に怯えているのだろうか。私はこんなにも晴れやかだというのに、気分が台無しだ。

「……はい」

しかし私は素直に頷いて、引かれるままに出口へと向かった。先生は大股に、早足に、早くこの場を去りたいと言わんばかりにずんずん歩く。私は名残惜しく、出際に振り返り再び机を見た。透明な冬の日の中で、脚を折られたそれは惨めに泣いていた。

第八声

「妹さんがいなくなられて精神的に不安定なのは分かります。でも、ねえ……ちよつとあの行動は、どうかと思いますよ。机だつて一応公共物なんですから……」

「すみません……本当にすみません！私がすっかり見ていないから……」

「いや、僕の方こそ娘さんのことを分かってあげることができませんで……大変申し訳なく……」

校長と母と担任はさつきから同じようなやりとりばかりしている。母の隣に座りながら、私はすこぶる退屈していた。校長室のソファ―は思ったより豪華じゃないなあとか、そんなことばかり考えている。しかし一室まるまる与えられるのは校長の特権だろう。他の先生達は職員室で、仲の良くない先生とも顔を合わせなくちゃならない。人間関係は大人になっても窮屈に違いない。

校長は広い額を撫でながらため息をつき、面倒臭そうに私を一瞥した。

「まあ……あれですな、しばらく自宅で大人しくしていた方がいいでしょうな。できればその、お医者さまにでも診てもらって……」
ぴくり、と思わず眉が動く。医者ですって！私のどこに医者に診てもらうべき箇所がある？私は至って正常だ、正常だからこそ自己防衛にあんなことをしたというのに。結局皆私のことを狂人扱いするのね。

母は母で泣いて謝るばかりだし、担任も校長の顔色を窺ってへいこらするばかりだし、誰も何の役にも立ちやしない。私は唇をとがらせてあらぬ方向を向いていた。すると校長が怒りを押し殺した笑顔で、「亮子さん、自分のことなんだからしっかり考えないといけないよ」などとほざきやがった。その通り、これは私のことだ。だから是非放っておいて欲しいと言っているのに。

結局私は、二週間の停学、自宅謹慎処分を食らった。

追ってまた連絡すると言い、今日はそれで帰された。もうこうなったら二週間と言わずずっと停学でいい。学生は噂話が好きな生き物だ。たった今朝起こったばかりの出来事なれど、その話はクラス、学年、さらには学校全体にまですぐに行き渡ってしまっただろう。その過程であらぬ情報が付け加えられ、私は失踪したかわいそうな妹を鬼のように憎んでいる極悪非道な女になるに違いない。妹の失踪には私が絡んでいるとか、そんな噂まで流れるだろう。まあそれは事実だからある意味仕方がないが。

帰り道でも母はずっと泣いていた。しわしわの目元をハンカチで押さえ、しきりと鼻をすすって、重たい涙を流していた。やせ細ったその肩に多少の罪悪感を覚えつつも、私は謝罪のための口は開かなかった。だって私は悪くないのだ。悪いのは妹、死してなお私の邪魔をする憎らしい妹なのだ。

「ねえ亮子……」

帰り道も半分に達した頃、母がおもむろに口を開いた。相変わらず涙を流しているが、つかえる喉から懸命に声を振り絞っている。私は顔を向けたが、母はじっと前を睨みつけたまま私を見なかった。

「あなた、麻子になんの恨みがあつたの……？」

一瞬、心臓が止まった。母は涙に濡れた目で、訴えるように、責め立てるように私を見る。

「麻子の部屋のゴミ袋。あれはあなたがやったのよね……？」

脳裏に鮮明な映像がよみがえる。あの部屋のありとあらゆるものを詰め込んだ黒いゴミ袋。私の目に前に立つ、胸から上だけの妹の幻影。

「何がしたいのよ……あの子がいたい何をしたっていのよ……！」

私はうつむいて沈黙した。言い訳ならある、訴えたくて仕方がない最大の言い訳が。だけどそんなことを言って、この人に通じるだ

るうか？ 通じるわけがない。

母の涙は止まらない。しかしその声は徐々に強くなっていた。

「……まさかあなた、麻子の失踪について何か知っているんじゃないでしょうね……？」

「……、母さん！」

たまらず声を荒らげる。私はどんな顔をしていただろうか。憤慨した顔？ 悲愴な顔？ 仮面のような無表情？ 何でもいい。

「やめてよ、母さんまでそんなこと言うの？ 私本当におかしくなっちゃうよ！」

自分でもどこまでが演技だか分からない。私は母に背を向けて走り出した。これ以上母と顔を合わせてはいられない。見透かされてしまいそうだ、私の犯した罪を。もちろん罪なんてのは形式の上だけで、本当は自分の行為を罪だなんて思っていない。だけど私は怯えていた。妹の残像を消したはずなのに、安心など少しも訪れやしない。

私は先に家に入り、階段を駆け上がった。確認しなければならぬ。部屋に入ると目に映る、妹の残像。それは私だけが見る幻影だと分かっている。だからこそ重要なのだ。あれが完全に消えない限り、私に平穏は訪れない。心理的なメーターのようなものだった。

自分の部屋を無視し、妹の部屋に駆け込む。床には黒いゴミ袋が散乱し、幾つか中身の出ているものもあった。母が出たのだろう。この部屋に入り、これを見つけ、愕然と中身を見ているうちに、学校からの呼び出しを食らったに違いない。ゴミ箱の中身も見られたようで、うさぎの頭が外に出ていた。

そして

「……まだ……」

妹は、いた。私の目の前に、変わらぬ表情で立っていた。

頭だけで。

「……足りないっていうの？」

全身の力が抜け、私はその場にへたりと座り込む。妹の生首が悲

しげに私を見つめていた。消えてない！昨日までであった胸は消えたけれど、頭が消えてない！

どうして唇がわなわなと震える。やるだけのことはやった。彼女のありとあらゆるものを壊してやった。いったい何がたりないというの！

出して。

「……っ！」

耳の内側から声が聞こえる。私は思わず残像の顔を見上げた。しかし顔は動いていなかった。

しかし声は確かに聞こえる。私の幻覚とは別に、確実に。

私をここから出して。お姉ちゃんが救われるにはもう、それしか道はないのよ。

「……どうということよ？」

低く唸るように、頭の中の声に返事をする。体内で大太鼓を叩いているかのように、鼓動が激しく全身を打った。掌にじとりとじんだ汗を握り締める。妹の声はかすかな吐息に乗せて囁くように答えた。

詳しくは言えない……。ただお姉ちゃんだって分かっているはず……。このまま大人しく謹慎処分食らってたって、あなたの中の私は消えない。だから早く、ここから出して……。

「……っ誰がっ」

「亮子？」

吐き捨てようとしたその時、階下から私を呼ぶ声があった。母だ。いつの間にか帰ってきたらしい。私はあわてて妹の部屋から飛び出

し、階段の上から返事をした。

「何？」

母も階段の下に顔を出す。さすがにもう涙は止まっていたが、しわの落とす影には変化がなかった。

「貴平君が来てるの。話してくれる？」

母の横から、確かに貴平が顔を出した。今はまだ学校の終わる時間ではないというのに、また休んだらしい。今まさに帰ってきたと言わんばかりに、制服の上にコートを着ていた。私は「上がって」と言つて、すぐに部屋の方へ引込んだ。妹の部屋のドアを閉めなければならぬ。あんなところを貴平には見せられないのだ。

貴平はすぐに上がってきた。私は彼を自室のベッドに座らせ、自分は机の椅子に座つて向かい合つた。椅子の方が高かったので、貴平を見下ろす形になった。

「……」

「……………」

貴平は目を伏せ、なかなか口を開こうとはしなかった。まっすぐに視線が見つめるのは床ばかり。寄せられた眉は妹の失踪を聞いた時よりももっと苦渋に満ちていた。彼がしゃべり出すまで私は何も言つつもりはない。言う必要もない。私から彼に話すことは何もなかった。彼は恐らく学校で起こった事の顛末を全て知っているだろうけれど、私はそれについて言い訳をする気はない。ただ彼から文句があれば、黙って聞くつもりだった。

どのくらい経つた頃だろうか、彼は真一文字に結んだ口を突然ぱくりと開くと、私を見上げてはつきりと言つた。

「お前どうしちゃったんだよ」

予想外の言葉に私はいささか狼狽した。どうした、と聞かれてもこつした、と答えられるようなものではない。しかし彼の目はひたすらにまっすぐで、何も答えずにはいらなかった。

「別に」

「嘘つくなよ」

曖昧に濁した言葉はすぐに見抜かれる。鋭く的確な指摘に唇を噛みつつも、私は見苦しく反抗した。

「なんでついてるって言えるのよ」

「お前はいきなり暴れたりするような奴じゃない」

彼の言葉は力強く、真剣だった。経験に裏付けされた確証のある言葉。いつも私を見てきた彼だからこそ言える言葉。

それでも私のことを彼は知らない。

「なあ、何があっただんだよ……？」

彼はほとんど泣きそうに額を押さえた。私は瞬時に上手い答えを思いつけず、沈黙するより他なかった。私と方向は違えど、彼も確実に苦しんでいる。恋人が消え、ただでさえ落ち込んでいる時に、もう一人の幼なじみがその恋人に悪意を示す行動を取った。私達二人を生まれた時から知っているからこそ、理解しがたいひずみがあるのだろう。

だけどね、貴平。私と麻子との間には、最初からひずみがあったんだよ。

「貴平」

ため息混じりに名を呼ぶと、貴平はぱつと顔を上げた。本当に素直な反応をする。子どものようだ。

「テレパシーって信じる？」

私の言葉に貴平は眉をひそめた。

「テレパシー？」

しかし彼は笑うことなく、真剣に腕を組んで首をひねる。

「……ってあの、遠くから気持ちに通じる奴か？」

「まあそんなところ。信じる？」

彼は不審そうな目でじつと私を見上げ、用心深く答えた。

「……場合による。むやみには信じられない」

「じゃあ信じて。今この場だけでいいから」

貴平はますます分らないという顔をする。予想の範囲内の反応だ。私だって最初から信じてもらえとは思っていない。

だけど話さなくては。

「今から話すこと。……全部信じて。お願いよ」

ひずみの狭間で誰よりも苦しんでいる彼に、私のことを話さなくては。例えこの身を破滅に導くことになるうとも、これがあの子の掌で踊るだけの結果になるうとも。

彼はまだしばらくじっと私を見上げていたが、やがて深く頷いた。今この時だけでも彼は私を信じ、私もまた彼を信じている。 条
件はそれだけで十分だった。私は一度瞳を閉じて、あの声が聞こえないことを確認すると、小さな声で話し始めた。

第九声

午前二時を回った。

私は普段着の上にしつかりとコートを着込み、そつと部屋の戸を開けた。誰もいないと知りつつ左右を見回し、電気もつけずに階段に足を伸ばす。両親は一階の和室で寝ていた。今日　日付的には昨日　も色々あったことだし、疲れてぐっすり眠っているだろう。なるべく足音を立てないよう、スリッパも履かずに階段を下りて、私は玄関へと向かった。並べられた靴のうち、最も履きやすく動きやすいスニーカーを選ぶ。一秒で開けられる鍵を五秒かけて開け、私は闇夜へ抜け出した。

空には月も星もなく、ぼつりぼつりと等間隔に設置された街灯だけが弱々しく光っていた。さすがに昼とは比べものにならないほど寒く、空気を吸い込むと肺が凍る。目はすでに暗闇になれていて、門を開くのも簡単だった。ただ門の立てるさび付いた音だけが気がかりだった。きいい、と耳障りに高い音を立て門は開く。闇夜のそれは心臓に悪かった。私は開けっ放しで閉めようとはしなかった。

「亮子」

門の横にはすでに貴平が立っていた。毎朝立っているのと同じ位置。そこに貴平がいるのが当たり前になっていた。私は寒さに震えながら頷き、声を潜めて言う。

「行こう」

貴平も強く頷いて、二人は真夜中の住宅街を静かに駆け出した。息は吐いた瞬間凍りつき、しびれる頬を撫でて通り過ぎる。比較的薄着の貴平は私よりずいぶん身軽で、同時に走り出したのにそう間も置かずに距離があいてしまった。いつもなら私より先に行くなんてこと絶対はないのに。今夜の彼は相当焦っている。

でもそれも仕方ない。何せこれから向かうところは

お姉ちゃん……。

「……！」

どくん、と心臓の音が一際大きくなる。と同時に周囲と耳が遮断され、鼓膜の内に音がこもる。

響く。脳に、あの声が。

「どうした亮子、大丈夫か？」

異変に気付いた貴平が、ペースを落として隣に並ぶ。その気遣う声さえ入ってこない。私は黙って歯を食いしばり、声を振り切るようにスピードを上げた。しかし当然のように声は脳内から出ていきはしない。

お姉ちゃん、嬉しい……。来てくれるのね……。

囁く甘い声。何よりも、誰よりも憎い、いつまで経っても消えない声。

うるさい、うるさい、うるさい！

「行く、行くから黙ってよ！」

「……亮子！」

貴平のやや声高な呼びかけが膜を突き抜けて脳に入る。彼は走りながら、人差し指をしきりと唇に押し当てていた。それで、先ほどの自分の声が、夜道には恐ろしい大きさだったと初めて気づく。私は苦々しく唇を噛み、小さな声で貴平に謝った。貴平は怒りもせず首を振り、むしろ私を気遣うように声を潜めて言う。

「また、聞こえたのか……？」

心配と期待が五分五分で入り交じった声色。私は震えるあごを小さく引いた。きつと、震えにしか見えなかったに違いない。

夕方の話に戻る。私は「失踪した妹の呼ぶ声が聞こえる」ことを彼に話した。「失踪した」とだけ言った。彼は私の頭を疑ったりせ

ず、始終真剣に聞いてくれた。どこまでも素直で、お人好しな人。話をしながら、私は場違いにも高揚していた。

「……もし居場所が分かるんなら、」
話が終わると、彼は硬い声で言った。

「今すぐにでも行くべきだ。麻子、ずっとお前のこと呼んでるんだろ」

「……そうね」

言われるかとは思ったが。そう簡単に決められないから、こうしてあなたに話しているというのに。

実際私は決めあぐねていた。妹の言うことは総じて正しい。このままずっと部屋に閉じこもっていることはできない、何かしらの行動を起こさなくては。

「状況は分かるのか？麻子の」

「……それは、分からないわ。言ってないから」

「そうか……」

私の嘘に、彼は難しい顔で考え込む。私はもう彼の顔を真っ向から見ることも苦痛だった。その口から次に飛び出す言葉は何か、それを考えると気が気ではない。そんな私の気持ちもつゆ知らず、彼は極めて真摯に考えて口を開くのだ。

「場所は？」

私は黙り込んだ。

最も 聞かれなくなかったことを。

分かっている。普通この状況で居場所を聞かない人はいない。

一種賭けのような気持ちだった。アンバランスな私の気持ちだが、どっちに倒れるかの。

聞かれたら答ええないといけない。答えたら行かなければならないだろう。行くなれば彼は「俺も行く」と言い出すに違いない。そうしたら私は彼の目の前で 彼の愛する人を、土の中から掘り返さなくてはいけない。

胃がとげの生えた手に握りつぶされたみたいに痛んだ。大袈裟で

なく、私のこの先の人生はここで決まる。このまま知らないを押し通してしらはつくれるか、素直に居場所を吐いて妹を土の中から出すか。どちらに転んでも、もういいようにはならないだろうけれど。

貴平のまつすぐな目が痛いくらい体に刺さる。私は幾度も浅い息を吐き、それから深いため息をついて、ゆっくりと口を開いた。

「それにしても、なんで麻子は雑木林なんかに……」

走りながら呟いた彼の言葉に、心臓の肉が引きちぎられる想いがする。私は聞こえない振りをしてスピードを上げた。彼は知らない生きた麻子が、何らかの理由で今現在雑木林にいるのだとは思っていないのだ。

元々少なかった街灯の数が次第にさらに減っていき、道を照らす光が弱くなる。足元を見るのがやっとで、道の奥に何があるのかは見えなかった。貴平が持ってきた懐中電灯をつけ、行く先を照らす。街灯の数に比例して人家の数も徐々に少なくなっていた。妹の眠る地は近い。

妹は、私を呼んで 何が目的なのだろうか。

だって妹はもう動けないはずだ。生きているなんてことは有り得ない。私は幽霊など信じてはいない、だが、妹の精神は死してなお私にテレパシーを送り続けている、そんな風に言えば不思議と納得できた。でも死体が動くとは思えない。動けたとして、土の中で腐りきったそれに何の力があるう？ きっと私のような弱い少女一人も倒せないほど貧弱に違いない。

そう、力は。

「着いた……」

貴平がつぶやき、歩調をゆるめて立ち止まる。私も彼の隣に立ち、目の前に際限なく広がる闇の塊を見上げ息を止めた。

吞まれる。

その巨大な林を目の前にしたとき、私は瞬時にそんな戦慄を走らせた。

懐中電灯の小さな光に照らされたそれは、一本一本の木と言うより恐ろしく巨大な闇だったのである。巨人の手のような葉は星一つない夜空と溶け合って、今にも私達を覆い尽くそうとしている。冷たく風が吹くたびそれは波のような音を立てて揺れた。波は私の中にまで及び、静かに心をかき乱していく。

私は冷えた指先を握り締めたまま、動かなかった。

そして急に恐ろしくなった。他に対してではない、自分自身にだ。私はかつてこんなところに妹を埋めたのだろうか？こんなに暗い、まるで、魔王の口のような、ところに？風が吹くたび膝を抱えてうずくまってしまうくなる、不気味な未開の地に？春も夏もまるで関係なくいつも氷に囲まれているような、こんな空間に？

「亮子」

冷たい声が私の名を呼ぶ。そして私が返事をする間もなく、大きな手が私の手首を強くつかんだ。

「……行くぞ」

そう言った貴平の目は、有無を言わさぬ黒さで。

私は答えなかった。声を出すことができなかった。喉の震えを何かが押さえていて、無理に出そうとすると嗚咽のような音しか出てこない。貴平は一度強く顔をしかめ、黙って林に足を向けると乱暴に私を引っ張った。その力は血管をつぶすほど強く、掌がどんどんしびれていく。私は握られた腕を振って離すよう訴えたが、彼はそんなことに構わずずん林を進んでいった。足下を懐中電灯で照らし、闇雲に。そして振り返りもせず「どこだ」と低い声で唸る。私は顔から血の気が失せた。今私の手首を握っている彼は、貴平ではない。この林のどこから出てきた、魔物か何かなのだ。

「麻子はどこだ……！」

彼の手にはさらなる力がこもる。憎しみのような力だ。目の奥にじ

わりとしびれるような感覚が広がり、私の目には涙がにじんだ。

ああ、やっぱり間違いだったのだ。彼をここに連れてくるべきではなかった。

「教える……教えるから離してよ！」

痛みに耐えかねとうとう怒鳴る。彼の手がはつとしたようにゆるみ、同時に私はそれを振りほどいた。懐中電灯の光に照らされた彼は、なぜだかとても驚いたような顔をしていた。なんて顔だ！自分でやっておきながら。私が手首をさすって睨みつけると、彼はいつもの表情に戻って「ごめん」と小声で言った。

私は彼の前に進み出て、ぐるりと首を巡らせた。見渡す限り似たような木、木、木。何という種類なのかは知らないが、細長く、背の高い木だ。どれもこれも自己主張せず、同じようにまっすぐ立っている。続いて自分の足元を見た。そこは道ではない。そもそもこの林に道などない。私は一度入ったことがあるから、それくらいのこととは知っていた。

知っていた、が。

「どうした？」

一向に動こうとしない私に、貴平が不安げに声をかけた。しかし私は振り向かなかった。内心では顔面蒼白になりながら。

覚えていないのだ。妹をどこで殺し、死体をどこに埋めたのか。

元々もう二度と来る気もなかった場所だ、目印など付けて誰かに見つかつては大変と、あえて少しの痕跡も残さなかったのだ。どの木も、どの土も、同じに見える。下手をすれば死体を探すところかこのまま遭難、そう思うほど自分の立ち位置が分からなかった。

「亮子？」

貴平の声がいらだちを帯びる。私は拳を握ったまま動かなかった。まずい。さっきの彼の手の力、今は落ち着いているが、またいつあなるか分からない。ただでさえ私の煮え切らない態度に焦れているのに、居場所が分からないなんて言ったら。

お姉ちゃん……。

「……！」

脳に響く声に、私は全身を震わせた。

お姉ちゃん……右よ……もつと右……。

呼んでいる。彼女が、私を。

私は身体を右に向け、土の上へ迷わず踏み出した。貴平の懐中電灯がその先を照らし、後ろからついてくる。私はできる限り後ろ姿で平静を装って、道なき道を無言で歩いた。彼は今、妹が私に話しかけていることを知らない。この時ばかりは彼女に感謝したい気持ちになった。囁くような声はさらに続ける。

まっすぐ進んで……そう……その木を曲がるの……左よ……。

直進したところに他のものより一回り太い木があり、私はそこで直角に左に曲がった。貴平があからさまに不審な顔をする。日常ではまず滅多にしない不自然な歩き方だからだ。しかし私は無言で歩いた。唇を引き結び、冷たい拳を握って、ひたすら前へ進んでいった。

もう少し前……木があるでしょう、大きな木……そこよ……。

妹の声が徐々に歓喜を帯びていく。私は無言で、言われた通りに歩いた。そして歩きながら、心臓が凍てつくような思いに襲われていた。

小さな光が照らす地面。それはだんだんと、私の知っている形状へ広がっていたのだ。

第十声

シャツの下に嫌な汗がにじむ。私の意志に関係なく、脳があの日
の記憶をフラッシュバックする。最後に見た彼女のおびえた顔。悲
鳴も上げさせず絞めた細い首。力の抜けきった体の重さ。震える歯
の隙間から漏れた白い息。少しずつ土に消えていく妹の身体。

「……あ、」

所狭しと並んでいた木々が開け、目の前に穴のような空間が広が
った。

私は見覚えのある場所に立っていた。他の木より二回りも三回り
も太い、古い大木。その周辺だけ木が生えておらず、両腕を直径と
したくらいの丸いスペースが空いていた。一週間と少し前、私は確
かにここを訪れたのだ。今はもうこの土の下に埋まった人間と一緒
に。その土は今、何事もなかったかのようにただ凍りついている。
しかし私には見えるのだ。その下に身を横たえた、哀れな私の妹
が。

「あ、さこ……」

膝から力が抜け、凍てついた地面にがくりと落ちる。私は無意識
のうちに四つんばいになり、爪を地面に食い込ませていた。そして
土をえぐり取り、脇にどける。幼稚園の砂場でやったのと同じよう
に、自分の手を使って地面を掘り返し始めた。

「亮子……？」

上から貴平の困惑した声が降ってくる。懐中電灯の光が私の真後
ろから照らしていた。

「麻子は、どこに……？」

「ここ……」

「え？」

横髪が頬に張り付いて口に入る。私はそれを噛みながら、袖口や
膝が汚れるのも気にせず、ただひたすら土を掘った。頭の中を、た

だ一人の人間で一杯にしながら。

麻子。

「ここにいろの、麻子……」

凍りついた土は硬く、ぼろぼろしていた。爪の間に入り込み、残酷な痛みが指先を襲う。しかし私は手を止めなかった。残酷だつて？この程度、何が残酷なものか。私が麻子にしたことと比べたら

。ばた、ばたと土に黒い染みが落ちる。何かと思えばそれは私の目からあふれ出す塩水だった。自分の理不尽さに腹が立った。

どうして、どうして、私は。

麻子は心の底から無邪気で、優しい子だった。小さなことにいちいち感動しては、幼稚園の帰り道、道ばたの花を摘んで花束を作って私にくれたり、雷の夜には手をつないで一緒に眠った。私が落としたアイスの代わりに自分の分をくれたり、中学に入学したての頃、なかなかクラスになじめない私に友達を紹介してくれたこともあった。受験勉強で夜中まで起きていた私にはココアを作ってくれた、自分の勉強もあつたのに。

柔らかな思い出ばかりが私の脳からあふれ、全身を包む。思い出せば思い出すほど。私はなんて態度の悪い、嫌な姉だったんだろう。

「麻子……」

自分の涙で土が溶ける。指の痛みはすでに麻痺していた。

繰り返し繰り返し、ひたすらひたすら、冷たい土をかき分けて麻子を探す。どれくらいそうしていたか分からない。自分がどれだけ深く埋めたのかも分からない。しかしやがて、不意に指先に土とは違う感触が伝わった。冷たい。それまでの冷たさとは違う冷たさの、それまでとは違うがさがさした感触。わずかにのぞいたそれに私は目を見開き、そこを中心にさらに土をかき分けた。だんだんだんだん、それが広がっていく。崩れ落ちる土とは違う、確かに形のあるもの。すぐに黄土色の力サ力サした唇が現れ、その上の土を払うと深く閉ざされたまぶたが、その先についた長い睫毛が、そのさ

らに上に弓なりの眉が、と　私が彼女の部屋で見た幻影とは逆に、
少しずつ彼女の姿が現れていく。そしてとうとう、私と全く同じ顔
がその全貌を現した。

懐中電灯の真下。生前のみずみずしさなどまるでない、干からび
た頬にその光を受けて。

「麻子……」

呟いたのは私ではなく、ずっと立ちつくしていた貴平だった。

彼は私の隣にガクンと跪くと、水分の抜けきった麻子の頬に震え
る両手をおもむろに添えた。懐中電灯は地面に転がり、あらぬ方向
を照らしている。指先でそつと頬をなぞると、彼は唇をわななかせ
た。

「これは……どういうことだ……亮子」

私は膝の上でぎゅっと汚れた手を握った。止めどなくあふれる涙
はいったい何を示しているのだろ。汚らしい。　ここに来て
ようやく芽生える罪の意識なんて。

もう、隠すことすらない。

「私が……殺したの」

「……なに？」

「殺した、の。一週間、と少し前、この林で、首を絞めて」

言い切れぬ内に私は嗚咽を漏らした。胃の奥底から何かが逆流し
てくる。口の中に気持ち悪い酸っぱさが広がった。しかし口の外に
は何も出なかった。いつそのこと全て吐き出してしまいたかった。
吐き出して、それで、誰か私の頭を殴って、全てを忘れさせて欲し
い。そのままここで永眠したって構わないのだ。

貴平の顔がみるみる色をなくしていく。状況を理解して、全身が
震えていた。

「……お前」

かすれた、引きつった声。私は以前この声を聞いたことがある。
猫のシーザーが麻子に怪我を負わせた時だ。その時あの猫を叱り飛
ばした声は、確かにこのようだった。

彼の顔は蒼白になったかと思うと次の瞬間怒りに染め上げられ、猛り狂った手が私を地面へ叩き付けた。硬い土に後頭部が打ち付けられ、脳が前後に揺れたかと思うと、一秒後にはぐいつと襟首をつかんで持ち上げられる。頭が動きについていけず、私は彼の前にのど元をさらけ出した。

「お前、なんで……どうしてだよ！」

貴平が私に馬乗りになり、唾を吐きかけながら怒鳴った。襟を握る力は先ほどとは比べものにならず、私の呼吸が細くなる。どうして、なんて。あなたが好きだからですなんて口が裂けてもいえないのに。

貴平のことだけではない。私は彼女のことが疎ましかったのだ。何度でも言おう。私は彼女のことを疎ましかった。この世に産み落とされた瞬間、いや、「双子である」と認識した腹の中にいたときから。二人いつでも比較されると運命づけられたその瞬間から。確実に芽生えていた殺意が、貴平の件を引き金として解放されただけだ。

いつだって誰にだって、私達は比較された。成績や運動神経、そういう数値的な能力なら麻子に負けてはいなかった。しかし普段付き合っているだけでは、そんなことは分からない。分かるのはいつだってまとう雰囲気、性格。私は「冬」、どこか冷たくよそよそしい、触れれば凍りつくような女。麻子は「春」、どんな人間の心も温める、誰にでも優しく手を差し伸べる女。

いつだって心の中で渦巻いていた。いつも隣にいた彼女への、憧れ

嫉妬。

私はただ、麻子のようになりたかったのだ。

「……貴平」

喉の奥から声を絞り出し、愛しい人の名前を呼ぶ。彼はぐつと手を引いて、私に頭を持ち上げさせた。

「私は、麻子を殺したの……。それだけは事実。理由なんて……な

いわ……」

私は嘘をついた。理由を言ってしまうのがこの期に及んでまだ怖かった。

貴平の顔が見る間に歪む。憎しみに満ちた、初めて見る彼の顔。胸に悲しみがこみ上げた。私は一人を殺すことで、もう一人の心も変えてしまったのだ。

「お前つ……ふざけんじゃねえよ！」

彼の右手が襟首を離れ、白くなるほど強く握られた拳が私の真上に振り上げられる。私は涙を頬に伝わせながら、静かに目を閉じた。もういいのだ。やるだけのことはやった。彼に殴り殺されることで罪が晴れるのなら、それだけで十分だ。

彼の拳が風を切る。わたしは齒を食いしばって、来るべき痛みに備えた。

しかし

「貴平、やめて！」

拳の波動を感じるほど近くなった瞬間、私と全く同じ、私のものではない声が空を裂いた。

一瞬、時が止まった。貴平も私もこの木々も土も、全てのものが呼吸を止めた。私の目は見開かれ、声のした方を凝視している。貴平もその拳を空中で固め、首だけを回してそこを見ていた。恐らくこの時ばかりは、私達の考えていることはただ一つ。

有り得ない。

私が掘り返した、麻子の墓。外に現れていたのは顔のただ一部だというのに。

そこから離れた場所の土が二カ所、ぼこり、と盛り上がって崩れ落ちた。

そしてその穴から、ほとんど骨のような両手が現れる。その手は

そうだ。確かに彼女は死んでいるのだ。普通の女子が、一週間以上土に埋まって生きているはずがない。

「けどな、麻子……」

貴平が、現実を受け入れたわけではないだろうが、低く怒気のもった声でうなった。襟首を握る手に再び力がこもる。

「こいつは、お前を殺したんだぞ……！」

私は黙って麻子から目をそらした。否定はできない。この体はつきりと覚えている、彼女の首のもろさ、震えながら動かししたシャベル。それに何より、殺された本人が一番分かっているはずだ。

なのに　麻子は悲しそうな顔で首を振った。

「やめて。確かにこの身体は死んでいるけど……」

「やっぱり……！」

「聞いて、違うの！お姉ちゃんは私を殺してないの！」

なに？

「麻子、私はあなたを殺したわ。しっかり覚えているもの……」

私は首を絞められたまま、細い呼吸に乗せて言った。今頃になつてから全部妄想でしたなんてあり得ない。あの感触も、底冷えする空気も、あの達成感も、全て消しようのない確かな事実なのだ。

それでも麻子とはかたくなに首を振り続ける。そのたびにさばさの髪が揺れ、乾いた頬を叩いた。

「違う、違うの。お姉ちゃんが私を殺したんじゃないわ」

彼女は顔を上げ、いったん言葉を詰まらせる。その唇は苦渋に満ちて震えていた。そして次にそれが開かれた時、私は信じられない言葉を聞いた。

「私がお姉ちゃんを殺したの」

第十一声

何を

言っているんだ、この子は？

貴平の手が襟首を離れ、私の頭は地面に落下した。しかし痛みは感じない。そんな痛みなどよりもっと強い衝撃が私の全身を駆けめぐっていたから。そしてそれはあまりに強すぎて、感覚を麻痺させた。私は思わず自分の首筋に手を当てる。確かに脈打つ、太い血管。麻子が 私を殺した？ 私が死んでいる？

「麻子」

私が口を開きかけると、彼女は強く私を睨んでそれを制した。「嘘だっと思ってるでしょ。本当よ。だって私のこの身体自体、私のものではないんだもの」

「うそ……」

じゃあ、誰のものと？

いや。分かる。麻子の身体のように、そうでない身体。そんなものはこの世に一つしかない、少なくとも私が知る限り。

私の。

「私の身体が、麻子の身体だって言うの……？」

麻子の、死んだ身体が。そして、私の、生きた身体が、本当は。

彼女は一步私に歩み寄りながら、無表情に頷いた。乾燥し、しわだらけになりながらも、腐らずに動くその身体。

「うそ……」

私の、いや、麻子の いやや、私の体が震え出す。この声すらも、私の声ではないというのか！

「嘘よ、だって、私には私の記憶が確かにあるもの、あなたの首を絞めた記憶も、その死体を埋めた記憶もあるもの！この身体は私のものよ！」

「それは、お姉ちゃんのお精神の記憶と、私の身体のお記憶が混ざったのよ。首を絞めるまでが私の記憶、その後からお姉ちゃんのお記憶の首を絞める前まで、曖昧なところがあるでしょ？」

反論できずに言葉に詰まる。彼女の言うことは正しかった。私は私はどうやってこの林に彼女を連れてきたのか、まるで覚えていないのだ。

「……私達は、」

静かに、静かに、歩み寄ってくる彼女に畏怖している。私はまだ上に乗っていた貴平を押しつけて立ち上がった。ぶつかり合う私達の視線。麻子の目は強く、私は靴底を引きずって後ずさる。

麻子の土色の唇が、冬色を仄めかして動いた。

「あなたが死ぬ瞬間、互いの精神だけ入れ替わったのよ」

あり得ない！

全身の汗腺からどつと汗が噴き出し、冷たい空気がそれを冷やす。

麻子は薄っぺらい肩を器用にすくめて小さく首を振った。

「もちろん、私はそんなことしたくなかったんだけど。お姉ちゃんのお異常なまでの反抗に、私はかなわなかったみたい」

「なら 死んでるんなら、どうして動くことができるのよ！」

「精神が生きているからよ。……でもやっぱり動くのはつらい。限度があるわ。ねえ、だから、」

嫌な予感、がした。背筋を虫がはい上がっていくような寒気を感じる。本来動くはずのないその身体は、つと顎を上げて私の目の前に立っていた。乾いた眼球がぎょろりと私を見据える。私はメドウーサに睨まれたかのように一瞬石像と化した。

その目には、春の暖かさも、無邪気さもなくて。

「いい加減その身体返してくれない？」

そして冬の冷たさすらもなかった。

言われた瞬間、私は呪いが解けたかのごとく踵を返して駆け出し

ていた。足がもつれて前のめりになりながらも、必死でこの空間から逃げ出そうとした。しかし背後からすかさず鋭い声が飛んでくる。

「貴平、捕まえて！」

言い終わらないうちに、私は強く腕を引つ張られ、後ろにいた貴平に羽交い締めになされた。地面に叩きつけなかったのは、麻子の身体に対する気遣いだろう。私のためじゃない。

「証拠　証拠がないわ！」

それでもなお私は叫ぶ。認めたくなかった。私が麻子を殺したことにしておきたかった。たといつか破滅することになろうとも、そうすることで私の中の美しさは保たれたのに。

麻子が私を殺したのだとしたら、この一週間私のしてきたことは何だったの？

麻子は棒切れのような足でしかし気丈に私の目の前までやってきて、見たこともないような歪んだ笑みで私の顔をのぞき込みささやいた。

「傷」

そのたった一言に、私の心臓は凍りつく。麻子はいっと目を細め、変に甘ったるい声を耳に寄せた。

「あつたでしょう？」

幼い頃、猫のシーザーが付けた傷。

腰の上が、じくじく痛む。

「……知らないわ」

必死に麻子から目をそらす。見ていない。普段見えるような場所じゃないし、見えるとすれば風呂場の鏡だろうけど　見ようもしなかった。見なくなかったのかもしれない。無意識のうちに私は有り得そうな事実から目を背けていたのかもしれない。

彼女は呆れたようにため息を吐くと、突然コートを脱ぎ捨てた。続けてブレザーも脱ぎ捨てて、セーターをめくり上げる。私は彼女が何をしようとしているのか瞬時に悟った。心臓が凍りついたまま

動かない。駄目だ。それを証明されたら、私はここにいられない。

「やめて！」

半狂乱になりながら私は悲鳴を上げた。しかし彼女は嗤いながら、Yシャツの裾をめくりあげて私に背中を示してみせた。

ミイラのように血色の悪い、とても十代のものとは思えない肌。水分は抜けきり、爪で引つ掻けば表面が剥がれ落ちそう。

しかしそれはただそれだけで、猫につけられたひっかき傷はどこにもなかった。

「！」

もう 何も言えない。

凍りついた心臓が砕け散った。今はつきり証明された。これは私の身体ではないのだ。この身体を流れる血液も支える骨も考える脳ですら私のものではないのだ。そして、目の前で嗤うこの死体こそが。水分すらなくなったこの身体こそが。紛れもない私の身体なのだ。

「一つだけ、教えて……」

私はうつむき、力無く声を発した。頬を再び涙が伝っていく。この涙さえ私のものではないなんて。

「どうして、私を殺したの……？」

私は、私が妹を殺すことに何の違和感も感じなかった。それは私が醜いからだ。だけど、だけど 麻子はそんな子じゃなかったはずだ。優しい子だったはずだ。何が私を殺す気にさせたんだ？何がこんなに 彼女の表情を歪めるんだ？

彼女はふっと笑いをこぼすと、事も無げにこう言った。

「だって、邪魔だったんですもの」

私は思わず顔を上げる。冷たく目を細め、口の端だけを持ち上げて笑う顔。それはまるで私だった。

「お姉ちゃんが貴平のことを好きなのは気づいてたのよ。それ以来私のことを憎らしげに見てることもね。それだけじゃないわ。お姉

ちゃん、昔から何かにつけて私より優れてたよね。ずっと妬ましかったの。私、何もできないから。だから、お姉ちゃんが消えれば絶対にすつきりすると思って、殺したのよ」

それはまるで、私だった。

「そんな……」

麻子が私と同じことを考えていたなんて。

何とも言い難い大粒の涙が、次から次へと地面へこぼれ落ちる。

貴平は私を羽交い締めにしたままで、その顔は見えなかった。

貴平、ねえ、あなたはこれを聞いてどう思うの？ ずっと私を締め付けたままなの？ あなたの愛する麻子は、こんなにも私に近い人間だったのよ。

私は静かに目を伏せた。呼吸をするたび、体が重くなっていく。強烈な眠気のようなものが、額の辺りに渦巻き始めた。

「……そんな子だと、思ってたなかった……」

「別に演じてた訳じゃないのよ。普段の行動に嘘はなかった。……ねえ、お姉ちゃんが一番分かっていることでしょう？」

甘い囁きに背筋がぞくつとする。彼女は知っている。私の気持ちも、全て。

「入れ替わって、目の前に死体があっても全く動じなかったのは、お姉ちゃんの気持ちと私の気持ちが共通していたからよね……？」

だから私は、目の前に穴が掘ってあることに疑問も抱かず、スコップを持っていることを自然として受け入れ、当然のように死体を埋めた。自分の死体を。

なんて愚かだったのだろう。 私達はなんて醜いのだろう。

意識が朦朧とし、頭が急激に重くなる。全身をかつて感じたことのない虚脱感が襲った。両足から力が抜けて、全体重が貴平にかかる。私の身体は貴平の腕からずり落ちて、丁度上を向くと彼の顔が至近距離に見えた。私は目を細めて、最期の最後に彼の顔を見た。

私はかつて、こんなに真つ青な彼の顔を見たことがない。全身の震えはこっちまで伝わってくるし、腕に入る力もわざわざらしいほど

強い。唇はしきりに細かく動いていて、ずっと何か呟いていた。まったくすぐな目は私を見てはいなかった。麻子を見てもいなかった。ただひたすらまっすぐに、どこか遠いところを見つめていた。

「貴平……」

名を呼ぶと、その身体が一際大きく震え上がる。その頬に宿るのは恐怖。私達どちらに向けられているかは知らないけれど。

ごくろり、とつばを呑む音が大きく聞こえる。彼は恐怖色に染まった眼を、泣き出しそうな眼を、それでもちゃんと私の目に合わせてくれた。唇の動きが大きくなり、ようやくその声が明らかになる。

「ごめん……ごめんな……」

何に対して謝っているのか、涙を含んだ声は、ひとまず私に向けられていた。

ああ。

心が溶けていくのが、分かった。貴平は私を見てくれたのだ。それだけでもう、十分だった。私のような人間には、十分すぎるほど十分だった。

「ねえ……もういいでしょ……？」

麻子の棒きれのような指が、私の頬に触れる。恐ろしく冷えた私の指。私の指。私の手。私の腕。私の肩。私の首。私の顔。

「さあ、もう戻るよ」

私の声。

体温が急速に空気に溶けていく。全身のありとあらゆる関節から完全に力が抜け、私は最後に落下する浮遊感を覚えた。重たい意識が海の底に沈んでいく。もう二度と浮かび上がることはできないだろう。

死んだ精神を入られた死んだ身体は力をなくして崩れ落ちた。

私は動かなくなった。常に自分のまぶたの裏を見つめ、土の中に横たわっている。暗闇では紫色の火花がしきりとはじけて漂う。それだけが一定の速度で変化していた。

愚かなことに、麻子が私と同じ気持ちだったと知ったとき、私は少なからず喜びを覚えていた。私達はやはり、一つの卵に入っていた双子なのだと実感できたからだろう。麻子は何も悪くないし、私も何も間違っただけなのだった。ただ、麻子は「春」で、私は「冬」だったただけなのだ。

貴平　彼は麻子を愛していた。だけど私は忘れない。最期に彼が謝ってくれたことを。目を合わせてくれたことを。だから、この先彼がどうなろうと知ったことじゃない。麻子を警察に連れて行くことが麻子に怯えながら生きていこうが関係ない。ただ、これだけは言える。私は永遠に、ここから動くことはできないだろう。

さようなら、麻子、貴平。愛してたよ。

第十一声（後書き）

完結です。お読み頂きありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8534g/>

呼声

2010年10月8日11時54分発行